その日少女は怪獣に出会った

暗愚魯鈍

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは少女達が勇者として戦う物語ではない。

これは少女達が怪獣使いとして怪獣と共に戦う物語である。

目次

少女は守護神と出会う ―――― 1
少女達は比翼の守護神と出会う ―― 21
少女は王と出会った ―――― 47
少女は闇へと堕ちた ―――― 72

少女は守護神と出会う

『友奈。この勾玉はね、母さんの一族に所縁ある品物なんだ』
『お母さんの？』
　幼い頃、少女は父に灰色の勾玉の首飾りを貰った。母は彼女が物心つく前に死んだと父に教えられた。
『もし困った事があったらこの勾玉に祈りなさい。そうすれば玄武様がお前を助けてくれる筈だ』
『玄武…様？』
　少女は玄武様という聞き慣れない単語を聞いて首を傾げる。
『玄武様はこの星の守り神なんだ。今は揺り籠の中で眠っているが…この勾玉を持った者が強く祈れば眠りから覚め、この星を悪しき者から守る…そう母さんは言っていたなぁ』
『じゃあ、私が助けててお願いしてくれたら助けてくれるの？』
『ああ、友奈が悪い子じゃなかったらね』
　そう言って父は娘の頭をわしゃわしゃと優しく撫でる。少女は父に頭を撫でられて

嬉しそうに顔を綻ばせた。
『これをお守りの代わりに持っていなさい。いつでも玄武様がお前も守ってくれる様にね』
額と口元に深く刻まれた皺を緩ませながら娘の首に勾玉の首飾りを優しくかける。
二人の年の差は父と娘というより祖父と孫と言った方が違和感がないほどの差があった。
彼女は捨て子だった。平城京跡の朱雀門に籠に入れられたまま放置されていたところを父が見つけ、子供に恵まれなかった父と母はその赤ん坊を養子にする事に決めたのだ。
『いいかい友奈。本当に自分ではどうにも出来ない事が起こった時に祈るんだよ。例えば…人間では相手に出来ない怪物が現れた時…とかね』
『うん！分かった！もし困った時はその玄武様に祈ればいいんだね！』
そう言って父にかけて貰った首飾りの勾玉を両手で握りしめながら彼女は朗らかに笑う。娘の笑顔を見て父も微笑み返した。
「お客様、港に着きましたよ」
「……むにゃ？」

身体を揺さぶられ、赤い髪を右側に結んだ少女…高嶋友奈（たかしま ゆうな）は目を覚ました。目を開けてみれば男性の船員が少し困った顔をして友奈を見ていた。友奈は自分が船に揺られてついウトウトしてしまい、そのまま寝入ってしまった事を思い出した。

「あ、すみません！すぐ降りますから！」

「いえ、先程着いたばかりなので大丈夫ですよ…まあ、お客様が最後の乗客なんですが」

大慌てで横に置いておいたリュックを背負って洋室から逃げる様に出て行く友奈。走って桟橋を渡って船を降り船着場に着く。

「わぁ～ここが香川かぁ」

高嶋友奈は中学2年生である。夏休みに父に勧められて四国の香川県まで一人で旅行にやって来た。彼女は思い切り伸びしながら港を見渡す。

「あ、あれが赤灯台かな？で、あの大きな建物がシンボルタワーだよね」

港にあった全体が朱色の灯台や遠くに見えるビルを眺める友奈。彼女が現在いる場所は香川県高松市の高松港。近くにある建造物に興味津々な目を向けながらスマホを取り出す。

「さてと、まずは何処かでご飯を食べなきゃだね。香川といえば美味しいうどん、てお父さんが言ってたから何処かに美味しいうどん屋さんはないかな」

そう言ってスマホでうどん屋を検索する友奈。暫くして近場のうどん屋を見つけた

のかスマホ片手に目的地を目指す。
その時彼女は気づいていなかった。首にかけた父に貰った勾玉の首飾りが淡く光り、何かを警告している事に友奈は気付かなかった。

うどん屋に入って、友奈はテーブル席に座って肉ぶっかけうどんを注文した。
「お待たせしました。肉ぶっかけうどんでございます」
とん、とテーブルに一杯の肉ぶっかけうどんが置かれ、友奈は早速うどんを啜り始める。
「う～ん、美味しい！このうどんモチモチしてて歯応えがあるね」
うどんの麺を啜りながらそう呟く友奈。やはり本場の讃岐うどんは美味しい。そう考えながら美味しそうに友奈は笑顔で食べる。
「お父さんと一緒にこのうどんを食べたかったな…でも、仕方ないか。もし機会があったら一緒に食べたいな…あれ？」
友奈はそう言いかけてある事に気付いた。首にかけた勾玉が温かく感じたからだ。気になって勾玉を見てみると淡い光を放っている事に気付いた。
「え？これって……」
友奈がその現象を疑問に思ったその時だ。街の方から凄まじい轟音と絶叫が鳴り響

いた。

ーーーピギャアアアアアアア！ーーーー

ーーーキィイイイアアアアアッ！ーーーー

「え!?何!?」

友奈は窓の方を向くと、窓の外に巨大な二体の怪物が街中に立っていた。

ーーーピギャアアアアアアア！ーーーー

ーーーキィイイイアアアアアッ！ーーーー

「か、怪獣?」

両腕が翼で翼竜やワイバーンとでもいうべき姿をした赤い目の凶暴そうな顔付きの怪獣。一体は幼体なのか少し幼さを残しており、もう片方は成体の様で幼体よりも一回り大きく、大きな角や突起、翼も相まってより凶暴そうな雰囲気が漂っていた。

ーーーピギャアアアアアアア！ーーーー

ーーーキィイイイアアアアアッ！ーーーー

その二体の怪獣…だだっこ怪獣　ザンドリアスもその母親である親怪獣　マザーザンドリアスはまるで何かに怯えている様に身体を震えさせながら、街中を逃げる様に歩く。それを見て町の人達はパニックを起こし悲鳴を上げながら逃げる。

「は、早く逃げないと……！店員さんこれうどん代です！」

「え、いやこんな非常時に…と、とにかく君も早く逃げて！」
友奈は店員に代金を払った後、急いで店から出る。そして外に出てザンドリアス達を眺めある事に気付く。
「……あの子達、怯えてる？それによく見たら怪我してる…」
そう、ザンドリアス達は街を破壊するのではなく、まるで何かから逃げる様に歩いているのだ。よく見ればザンドリアス達の身体には無数の傷跡が痛々しい程に刻まれており、ザンドリアスに至っては痛みのあまり涙を流しマザーザンドリアスが時折その傷口を舐めている。
「……もしかして何かから逃げてるの？でも一体何から逃げてるんだろう？」
では何にザンドリアス達は怯えているのか？と友奈が思った瞬間。地を裂く様な咆哮が轟き建物が大きく揺れた。
ーーークゥオオオオォォォォン!!!ーーーー
「え!?」
その咆哮と共に降り注ぐ紫の刃の雨。それが地上に降り注ぎ建物が破壊され、大地が裂け街は炎上。ザンドリアス達の身体に命中し新たな傷を与える。
ーーーピギャアアアアアアア!?ーーーー
ーーーキィイイアアアアアッ!?ーーーー

悲痛な叫びを上げる二体、そして先程の攻撃を放った元凶はゆっくりと空から落ちる様に現れた。

ーーーークアウウウウウウッ!!!ーーーー

その怪獣はまるで地獄から現れた番犬の様な恐ろしい姿をした怪獣だった。黒と赤の体色に体中に生えた鋭い刃、悪鬼の如き凶悪な容貌。その名は最凶獣　ヘルベロス。宇宙で名を馳せる怪獣だ。

「……あの怪獣から逃げてたんだ」

友奈はあの怪獣からあの二体は逃げていたのだと理解した。

ーーーークアウウウウウウッ!!ーーーー

ヘルベロスは地響きを起こしながら地上へと着地。そして自身の獲物であるザンドリアス達を見て残虐な笑みを浮かべ、唸りながら親子怪獣へと迫る。

ーーーーピギャア…ピギャアアアアアアアアー!ーーーー

ーーーーキィ!?キィイイアアアアッ!?ーーーー

マザーザンドリアスは怯えながらも我が子を守る為にヘルベロスへと立ち向かう。目から赤色光線　ヨルゴビームを放ちながら翼を広げ迫るマザーザンドリアス。対してヘルベロスは避けるそぶりを見せず突進。ヨルゴビームが身体に命中するが痛くも痒くもないとばかりにヘルベロスは笑い、マザーザンドリアスに体当たりを食らわす。

ーーーピギャアアアアアアア!?ーーー

「あ、お母さんが!?」

後ろに吹き飛ぶマザーザンドリアス。ヘルベロスは角を赤く光らせて雷撃　ヘルホーンサンダーをマザーザンドリアスへと放つ。赤き雷撃がマザーザンドリアスの全身を容赦なく雷で焼き、マザーザンドリアスは苦痛の声を響かせる。

ーーーキィィ…キィィイイアアアアッ!ーーー

ーーークァウウゥゥッ?ーーー

ザンドリアスは母親がヘルベロスに痛めつけられる姿を見て最初は怯えていたが、勇気を持ってヘルベロスへと突進。翼でペチペチとヘルベロスの背中を叩きまくる。

ーーーキィイイイアアアアッ!ーーー

ーーーピギャアアア……ーーー

ザンドリアスは「お母さんを虐めるな!」と言わんばかりに必死に翼でヘルベロスを攻撃するも、ヘルベロスは欠伸をする様に口を開けつまらないものを見る目でザンドリアスを見つめる。それを見てマザーザンドリアスは早く逃げろとザンドリアスに弱々しい声で鳴く。

ーーークァウゥ…クァウウゥゥゥゥッ!!ーーー

ーーーキィイイアアアアッ!?ーーー

次第に鬱陶しくなってきたのかヘルベロスは少し苛立った唸り声を上げ、ザンドリアスを蹴り飛ばす。そして右の肘の刃を赤黒く光らせ大きく腕を振るい光刃「ヘルスラッシュ」をザンドリアスへと放ち、ザンドリアスの身体を斬り裂こうとする。　その光刃はザンドリアスの身体を簡単に裂き、絶命させる死の刃。だがザンドリアスがその刃に当たる事はなかった…何故なら。

ーーーピギャアアアアアアア!!ーーーー

ーーーキィイイイアアアアアッ!?ーーーー

マザーザンドリアスが身を呈して我が子を守ったからだ。背中をヘルスラッシュで裂かれ赤い血が飛び散る。

ーーーキィイイイアアアアアッ！キィイイイアアアアアッ!!ーーーー

ーーーピギャアアア……ーーーー

ザンドリアスは母親のその悲惨な姿を見て泣きそうな声を上げる。マザーザンドリアスはザンドリアスを安心させようとするが痛みのあまり立つ事すら出来ず地面に這い蹲る。それを見て邪悪な笑みを浮かべるヘルベロス。

「……ッ」

友奈はそんな光景を見ている事しか出来なかった。当然だ、怪獣の争いに人間の様な非力な存在が何が出来ようか。精々踏み潰されるのがオチだ。出来る事と言えば逃げ

る事。幸いヘルベロスの注意はザンドリアス達へと向いている。その隙に逃げればいいのだ。ザンドリアス達は所詮は怪獣。人間ではないし助ける義理もない…ない筈なのに、友奈は拳を強く握りしめた。

「……確かにあの子達は人間じゃない…でも、それが助けちゃいけない理由にはならない」

友奈と言う少女は優しい子だ。例え相手が人間でなくとも、見捨てられない。目の前で痛ぶられる親子の怪獣を助けたい、そう彼女は思った。

（でもどうしたら…あんな怪獣に私が勝てる筈ないし…注意を引かせる？どうやって？何か、何か私に出来る事は…!?）

どうやればザンドリアス達を助けられるか必死に考える。その時だ、勾玉が一際強く輝き始めた。脈打つ心臓の鼓動の様な音が友奈の耳に響く。まるで何かを訴えている様に。

「……そうだ、この勾玉が…お父さんがくれたお守りがあった」

友奈は思い出す。父が昔言っていた言葉を。

『もし困った事があったらこの勾玉に祈りなさい。そうすれば玄武様がお前を助けてくれる筈だ』

父の言葉を思い出して友奈は勾玉を強く握りしめながら祈る。目を深く閉ざして一心に祈った。

（お願い玄武様。あの子達を、私達を助けて！お願い！）

友奈は願った。ザンドリアス達を、ヘルベロスに怯え逃げる人々を助けてくれと。その祈りが届いたのか勾玉は緑色に輝いた。

深い、深い海の底。そこで眠っていた守護神は純粋無垢な少女の祈りを聞き深く閉ざされていた瞼を開いた。

ーーーゴアアアアアアアアアアア!!ーーー

守護神は雄々しい咆哮を海底に轟かせる。そして頭部と尻尾、両手足を甲羅の中に収納し、手足を引き込んだ位置から火炎を噴射してＵＦＯの様に回転しながら自分に祈った少女の元へと向かう為に海上を目指した。

ーーークァウウウウウウッ!!ーーー

ーーーピギャアアアアアアアア……ーーー

ーーーキィイイアアアアアアッ……!ーーー

執拗に両腕を振るいヘルスラッシュをマザーザンドリアスへと放つヘルベロス。背中を何度も斬り裂かれても我が子だけは守ってみせると決して倒れないマザーザンドリアス。死に体な母を見て泣き叫ぶザンドリアス。

ーーーークァウウウゥゥゥゥッ!!ーーーー

嗜虐的な笑みを浮かべ、トドメと言わんばかりにヘルホーンサンダーを放とうとしたまさにその瞬間。

ーーーーゴアアアアアアアアアアアアア!!ーーーー

ーーーークァウウゥゥゥゥゥッ!!?ーーーー

黒い物体がヘルベロスへとぶつかり、ヘルベロスはその黒い物体に吹き飛ばされ建物を押し潰しながら転倒した。黒い物体は回転を止め、甲羅へと収納していた各部を出して地上へと降り立った。

漆黒の甲羅を持つ黒い巨体の怪獣…それは友奈が以前父から聞かされた”玄武様”という存在に非常に酷似した姿をしていた。

「……玄武、様?」

そう呟いた瞬間、友奈が首にかけていた勾玉が砕け散って光なり、その光が友奈の手の中に集まて三つの窓の様な枠がある青色の縦長の機械となった。

「これは……」

友奈はその謎の機械…バトルナイザーを握る。その瞬間友奈の頭の中に様々な情報が流れ込む。

「……まだよく分からないけど…これなら皆を、あの子達を助けられるんだよね」

その情報を理解した友奈はバトルナイザーを握りしながら黒い怪獣…自分の相棒である守護神に向かって叫ぶ。

「お願いガメラ!あの子達を助けてあげて!」

ーーーーゴアアアアアアアアアアアアー!ーーーー

友奈のその願いを聞き、大怪獣　ガメラは咆哮を轟かせながらヘルベロスを睨みつけた。

ーーークゥオオオオオオオオオン!!ーーーー

対するヘルベロスも自分を吹き飛ばしたガメラを睨む。自分のお楽しみを邪魔した愚か者を排除する為に背中のトゲから無数の光弾を矢の如く降り注がせる。

ーーーーゴアアアアアアアアアアアアー!ーーーー

それを見たガメラは自分の頭部や尻尾、手足を甲羅へと引っ込ませ甲羅の中へと収納。光弾の雨が甲羅へと命中するが甲羅には何の傷一つもなかった。

ーーーークァウウウゥゥゥゥッ!?ーーーー

自身の攻撃が通用しない事に呆気にとられるヘルベロス。その隙にガメラは収納し

ていた各部を戻し、体内に貯蔵したプラズマエネルギーと酸素を融合・圧縮する事で電離作用を起こし、形成されたエネルギーを口から放つプラズマ火球をヘルベロスへと放つ。ヘルベロスは左腕でプラズマ火球を防ぎ、そのままヘルスラッシュを放とうとし…そこでヘルベロスは気づいた。自分の左腕の肘の刃が焼失し左腕が黒焦げになっている事に。

ーーークァウウウゥゥゥゥッ!!!?ーーーー

「す、凄い……!」

プラズマ火球は万物を瞬時に燃焼させるガメラの得意技だ。その威力は頑強な肉体を持つヘルベロスの腕すらも瞬時に焼き焦がしてしまう程だ。

ーーークァウウゥゥゥゥッ!ーーーー

ヘルベロスは怒り狂い、口から火球を、角からヘルホーンサンダーをガメラへと放つ。だがその火球と雷撃はガメラの身体を傷つけず、逆にガメラの身体に吸収される様に吸い込まれていたのだ。

ーーークァウウゥゥゥゥッ!?ーーー

それを見て驚きの叫びを上げるヘルベロス。ガメラはヘルベロスが混乱している間に接近し、拳を握りしめ拳打（ハード・スラップ）　玄武拳を放ちヘルベロスの硬い装甲を破り亀裂を走らせる。

「まだだよガメラ！あの怪獣に休む暇も与えないくらい攻撃を与えて！」

ーーーゴアアアアアアアアアアア!!ーーー

友奈の指示を受け、怯むヘルベロスにガメラは息もつかせぬ拳打の嵐をヘルベロスの身体へと打ち込んだ。その拳の一発一発がヘルベロスの装甲を砕き、拳の衝撃がヘルベロスを襲う。

ーーークアウウウウウウッ……！ーーー

ヘルベロスも右腕で反撃するがガメラの左手で受け止められ、ガメラは自身の足のふくらはぎにある蹴爪　邪撃脚（カーフクロー）でヘルベロスの足の内側に自身の足をかけて、ヘルベロスを転倒させる。

ーーークアウウッ!?ーーー

地面に顔面を強打し苦痛の声を上げるヘルベロス。何とか立ち上がるが立ち上がった瞬間にガメラの肘にある爪の様な突起　邪斬突（エルボークロー）を活かした肘打（エルボー）ちを喰らわされヘルベロスは吹き飛ばされる。

ーーークアウウウウッ!?クアウウウッ！ーーー

ヘルベロスはよくもやってくれたなと言わんばかりにガメラを睨みながら唸り、右腕を大きく振るいヘルスラッシュを放つ。ガメラは右手をヘルスラッシュに軽くぶつけて弾き飛ばす。

ーーークァウウ……クァウウウウウウッ！ーーー

自分のあらゆる攻撃を防がれ、ヘルベロスは自身のプライドが大きく傷ついた。ヘルベロスはくるりと回転し鋭利な先端がついた尻尾をガメラへと向ける。この尻尾はどんな怪獣の硬い皮膚をも突き破るヘルベロスの切り札だ。どんなにガメラの装甲が硬くともこれは防げまい。そうヘルベロスは考え嗤っていた。

ーーーゴアアアアアア……ーーー

それに対しガメラはプラズマエネルギーを右腕に収束させ、右腕に炎を纏う。右手を手刀の形にして真っ直ぐヘルベロスの尻尾を睨む。

「ガメラ！尻尾を切っちゃえ！」

ーーーゴアアアアアアアアアアアア!!ーーー

ガメラはその炎の手刀　爆熱剣（バニシング・ソード）を尻尾へと振り下ろす。その炎剣はヘルベロスの尻尾を容易く切断した。

ーーークァウウウウウウッ……？ーーー

ヘルベロスは何が起こったか分からなかった。気がついたら自分の尻尾が宙を舞っていたからだ。尻尾の切断箇所が灼け爛れている。漸くヘルベロスはガメラの手刀で自らの尻尾が切断されたという事実に気づき、悲鳴を上げる。

ーーークァウウウウウウッ!?ーーー

痛みのあまりよろよろと後ろへ退がるヘルベロス。漸くヘルベロスは悟った。目の前のガメラは自分では勝てないと。火球と雷撃は吸収され、格闘戦では全く叶わず、ヘルスラッシュも軽く弾き返される。こんな相手に勝てる訳がなかった。だが、逃げた所でガメラは決して自分を逃さないだろう。

ーーーークァウ……クァウウウウウッ!!ーーー

自暴になったヘルベロスは右腕を何度も振るい、ヘルスラッシュをガメラへと放つ。当然の如くガメラには傷一つない。こっちに来るなとヘルベロスは悲鳴の様な叫びを上げ発狂した様に背中のトゲから光弾を放ったり、ヘルスラッシュを放つ。だがやはりガメラには通用しない。

「ガメラ、トドメだよ!」

ーーーーゴアアアアアア……!!ーーー

友奈の声を聞いてガメラはバニシング・ソードの時と同様、右腕にプラズマエネルギーを収束。拳を握りしめ炎の拳を形成する。そして咆哮を轟かしヘルベロスへと駆け出す。

ーーーークァウウウウウウッ!!ーーー

ヘルベロスは炎の拳を見て直感で危機を察知。全力で阻止すべく背中のトゲから光弾を、右腕の肘の刃からヘルスラッシュを、口から火球を、角からヘルホーンサンダー

を放ちガメラの動きを止めようとする。

ーーーゴアアアアアアアアアアア!!ーーー

だがガメラは止まらない。雷撃と火球は吸収し、ヘルスラッシュと光弾はその身で受ける。迫り来るガメラを見てヘルベロスが喚き立てるがガメラは容赦なく燃える拳をヘルベロスへと突きつける。

ーーークアウウウウウウウッ!!!?ーーー

肉を潰す音が響き、ヘルベロスの背からガメラの炎の拳が突き出ていた。これがガメラの必殺技の一つ　爆熱拳（バーニング・フィスト）だ。

ーーークアウウウウウウウッ!?クア……ウ…ウ…ゥゥゥ……ッ……ーーー

ガメラがヘルベロスの身体から拳を引き抜く。ヘルベロスの腹部は大きな穴が開きそのまま断末魔を上げて地面へと後ろ向きに倒れ…大爆発を起こした。

ーーーゴアアアアアアアアアアア!!!ーーー

「……勝った、勝ったんだ」

勝利の咆哮を轟かせながらガメラは傷付いたザンドリアス達の元へと歩む。そして両手をザンドリアス達に向け、そこから黄金の光…マナと呼ばれる神秘的なエネルギーを注ぐ。

ーーーピギャア…?ピギャアアアアアア!!ーーー

ーーーキイイイァァァァァッ!?ーーー

マナを注がれ、みるみると傷口が塞がっり始め、ザンドリアス達の傷が癒えてしまったのだ。自分の傷が癒えた事に驚くマザーザンドリアスと母親の傷が治った事で喜ぶザンドリアス。

「凄いよガメラ!傷を治す事も出来るんだね！」

マナとは地球の生命エネルギーだ。そのエネルギーを生命体に注入すれば回復治癒を齎す事が出来る。その力を使い、親子の傷を完全に治したのだ。

ーーーピギャアアアアァァァァ!ピギャアアアァァァァァ！ーーー

ーーーキイイイァァァァアアアァッ!!ーーーキイイイイァァァァァァァッ!!ーーー

親子は自分の傷を治してくれたガメラに頭を下げ、翼を羽ばたかせて空へと飛翔。宇宙へと帰っていった。ザンドリアスは見えなくなるまでずっとガメラの方を見て何度も感謝の叫びを上げていた。

ーーーゴアアアアアアアアアア……ーーー

最後にガメラは口を開けて、炎上する街の火を吸収して鎮火させる。そして主人である友奈の方に向き直す。

「ありがとうガメラ。あの子達を助けてくれて」

ーーーゴアアアアアアアアアア！ーーー

友奈の言葉に当然だと言わんばかりに優しげに咆哮を上げるガメラ。そしてガメラは光となって友奈の手に持つバトルナイザーへと収納された。

「……これからもよろしくねガメラ」

そう彼女は呟いた。きっとこれからも自分を助けてくれるであろうガメラ（相棒）にバトルナイザー越しにそう微笑んだ。

友奈は知らなかったが、怪獣が現れたのは香川だけでなかった。愛媛や高知、徳島…四国全土だけに留まらず日本各地、世界各地にこの日を境に怪獣が出現する様になった。世界は怪獣無法地帯となり、人類は怪獣という脅威に蹂躙される事になる。

だが、希望は残されていた。それは怪獣使いと呼ばれる少女達と彼女達が使役する怪獣達。邪悪な怪獣と空の彼方から襲来する異星人からこの星を護る最後の砦。いずれ友奈も出会うだろう、自分以外の怪獣使いの少女達と。

これは少女と怪獣の物語。勇者ではなく、怪獣使いとして少女達が世界を救う物語。

少女達は比翼の守護神と出会う

愛媛にある小さな森、地元に住む者達はそこを「入らずの森」と呼ぶ。滅多に人は近寄らず、好き好んで入る者もいない。入るのは肝試しに来る恐れ知らずの少年ぐらいである。

そんな森の中に一人の少女が地面に倒れ涙を流していた。淡い黄色の長い髪を持つ病弱そうな少女だ。

「痛ぁ……動けないよ……」

彼女は森の近くでいつもの様に読書にふけていたら森の方から謎の声が聞こえ、その声に導かれるまま森の中へと入った。そして声の主の所まで行こうとして…木の根っこに足を引っ掛けてしまい転んで足を捻ってしまったのだ。

「うぅ……やっぱり森の中に入るんじゃなかった…暗いし怖いし…こんな場所に誰も助けに来てくれないよ…」

入らずの森、その名の通り誰も足を踏み入れない場所だ。当然誰かが自分を助けてくれる…そんな漫画みたいな展開はない。

「もしかしたら…このまま誰にも気付かれずに一人で死んじゃうのかな?」

そう沈んだ気分になる少女。自分が死んだら両親は悲しんでくれるだろうか、友達は泣いてくれるだろうか、そんな暗い事を考えていたその時だ。奥から何かが歩いてくる音が聞こえた。

「!?だ、誰…?」

まさかこの森には怪物がいて、自分を食べに来たのか?そんな事を少女が考えた瞬間。奥から全身葉っぱだらけの少女が現れた。

「うひゃー!全身葉っぱまみれだ!流石のタマもこんな森の奥まで来た事ないぞ!」

「お、女の子?」

見るからにガサツで男の子っぽそうな少女が頭や服についた葉っぱを取る姿を見て少女は呆気に取られる。

「ん?誰かいるのか?」

そこで漸くもう一人の少女は倒れている少女がいるのに気づいた。

「なあ、お前がタマを呼んでた奴なのか?」

「え?違うよ、わたしも変な声に呼ばれて…」

「なんだお前もか…て、どっか怪我してるのか?」

「うん…足を捻っちゃって…」

男の子っぽい少女は少女が足を捻っている事に気付き、歩み寄って彼女を引き起こし

背中に背負わす。
「よっこらしょ、と」
「え!?な、何してるの?」
「おんぶだ。怪我してるんだろ?ならタマが森の外まで背負ってやる」
そう言って彼女は微笑んだ。
「え…でも、大丈夫?わたし重いよ?」
「なぁに、タマは力持ちだからな。まあ、タマに任せタマえ!」
そう豪快に笑う彼女。そして少女を背負いながら歩き始める彼女。少女は思った。自分より背は小さいけども、彼女の背中はとても大きく感じた。そして自分を助けてくれた彼女が少女には王子様に見えた。
これが彼女達の最初の出会い。彼女達の運命が決まった日。

時は流れ、少女…伊予島(いよじま) 杏(あんず)は入らずの森の付近にある木の下で読書にふけていた。
「……」
木陰で熱心にその本を黙読する杏。そんな彼女に一人の少女が近づいて来る。
「おーい!あんずー!」
「あ、タマっち先輩」

走ってやって来たのはタマっち先輩こと土居（どい）　球子（たまこ）。杏と同い年だが小学3年の頃に入院していた時期が長かった所為で留年してしまったので球子が中2、杏が中1なので先輩呼びをしている。

「すまんなまたしてしまって…で、今日はどんな本を呼んでるんだ？」

「ああ、不入森（いらずのもり）て本でね。入らずの森について詳しく書いてある本なんだ」

「あの森か？何でまたあの森の事を？」

杏が何故入らずの森について調べているのか分からず首を傾げる球子。

「実は昔タマっち先輩と出会った時の頃を思い出してね…少し気になって入らずの森について調べてるんだ」

そう言って杏は不入森と書かれた一冊の本を球子に見せる。

「この本によるとあの森の奥には神社があって、そこには虫の神様が二柱祀られてるらしいんだけど…誰もその神社に行った事がないんだって。一説によると神社に行く為の道が神秘的な力で隠されてるんじゃないかて言われてて、まさに入らずの森は現代のダーク・ゾーンなんだよ！」

「お、おう…」

目をキラキラと輝かせてそう語る杏に若干引き気味な球子。

「でね、その神社に祀られてる神様ていうのは……なんと蛾なんだって」

「蛾？そんなものを祀ってるなんて趣味悪いんじゃないかその神社」
「あはは、だね。でも何で誰も行った事がないのに祀られてる神様だけは知られてるのか…気にならない？」
「んー確かに気になるといえば気になるな」
誰も行った事がないのに何故か祀られている神だけは知られている…それを疑問に思う二人。そんな時だ、二人の耳に謎の声が聞こえた。
ーーーこっち、こっちに来てーーー
ーーーこっちだ、こっちに来いーーー
「!?」
二人は同時に同じ方角を見る。二人が向いた場所は入らずの森。そこから声が聞こえて来たのだ。
「……聞こえたタマっち先輩？」
「……ああ、聞こえたな」
二人は顔を見合わせて頷き合う。そして口を揃えてこう言ったのだ。
「「小さな女の子／男の子みたいな声が…ん？」」
あれ？と二人は首を傾げる。杏が聞いた声は女の子で球子が聞いた声が男の子…軽い矛盾が起こるが取り敢えず置いておく。

「……そういえば2年前にわたしが聞いた声もあんな声だったかも」
「確かに前に聞いた声もあんな声だった気がするぞ
…」
2年、二人が森に入るきっかけになったあの声と似ていると呟く二人。
「……タマっち先輩」
「あんずが言いたい事は分かってるぞ。さっきの気になるんだろ?タマもだ」
杏が言葉を出さずとも彼女の真意を理解する球子。杏も読んでいた本を手提げ鞄の中にしまいながらゆっくりと立ち上がる。
「少し、森の中に入ってみようか」
「だな。もし迷子になってもあの時みたいにタマが背負ってやるから安心しタマえ」
「うん」
そう言って二人の少女は森の中に入って行った。

ーーーこっち、こっち。早く来てーーー
ーーーこっちだ。あまり待たせるなーーー
時折二人の耳にそんな声が響く。やはり杏には女の子の、球子には男の子の声しか聞こえないらしい。

「結構奥深くまで来たな…」
「だね」
森の奥へ進み始めて15分程たった。奥へ奥へと進む度に周囲が暗くなり杏は不安になるが球子が彼女の手を優しく握っている為に怖くはない。
やがて段々と辺りが明るくなり始める。そして奥に鳥居が見えた。
「……神社?」
鳥居を抜けた先にあったのは古びた小さなお寺だった。暗い森の中とは違い、何処と無く神秘感が漂う場所だった。
「ここがあの本に書かれてた神社?」
本に書かれてた神社とはここの事だろうか?そう二人が考えたその時だ。社(やしろ)の扉が勢いよく開きそこから巫女服を来た少女が現れたのだ。
「貴女達が婆堵羅(バトラ)様と最珠羅(モスラ)様に選ばれた者達ね!」
「!?」
突然現れてそんな事を叫ぶ巫女に驚く二人。そんな二人に一切構わず巫女は鬼気迫る速さで二人に歩み寄る。
「最近卵がやけに活発化してたと思ったら…やっぱり盟約者を探してたのね!しかも天災の日に現れるなんて!」

茶色の三つ編みを靡かせながら二人の眼前まだ迫る少女。二人はその気迫に押され後ろに少しづつ後ろに退がる。
「こうしてはいられないわ！さっそく貴女達にはお役目を「はい、そこまでです馬鹿姉様」痛ぁ!?」
（（後ろからハリセンで殴られた!?））
バチコーン！と背後からハリセンで叩かれる巫女。それに驚く杏と球子。大きなタンコブが出来て地面に倒れる巫女の背後には球子達より2、3歳ほど年下そうな少年が神官服を着て立っていた。
「申し訳ありません神に選ばれた少女達よ。僕の馬鹿で不出来な姉がご迷惑をかけた事、心よりお詫び申し上げます」
「あ、そんなに気にしてないから大丈夫です…それより貴方達は？」
「申し遅れました。僕は安芸（あき）　大樹（だいき）と申します。そしてそこで倒れてる馬鹿が…」
「安芸（あき）　真鈴（ますず）よ。て、誰が馬鹿よ！」
どうやらこの二人は姉弟らしい。しっかりした…というより大人びている弟とダメな姉という印象だ。
「あの…さっきから言っている婆堵羅様とか最珠羅様てどういう意味なんですか？」
「そうね、まずはその事を教えてあげるわ。ついていらっしゃい」

「まあ、そういう事ですので社の方に入ってください」
　そう言って社の方に入っていく二人。杏と球子は暫く顔を見合わせてどうするかと考えるも、社の方へ入っていく。
「この森は私達…いえ、安芸一族が代々守ってきた土地なの」
「そこで僕ら一族はある卵を祀り、それが孵化するまで守ってきたんです」
「卵？」
　社の中に仏壇や祀られている偶像はなかった。その片隅に地下へと降りる階段があったぐらいだ。その階段を降りながら安芸姉弟の会話を聞き球子が首を傾げる。卵を守ってきた、その言葉の意味が分からずに。
「昔、宇宙から虚空の神　魏怒羅（ゼトラ）と星が産んだ破壊の王　呉爾羅（ゴジラ）という二柱の神が高知で熾烈な戦いを繰り広げたという話がこの家には伝わってるの」
「まあ、昔と言っても８００年程度ですがね。そこで暴れる二柱の神を封印すべく、大地が誕生させた双翼の守護神　最珠羅様と婆堵羅様。全てを恨みながらも四国だけを愛した怨霊神　禍大蛇（マガオロチ）様…計三柱の神が二柱の神を封印したのです」
「そして力を使い果たした禍大蛇様は海の底で永き眠りにつき、死にかけた最珠羅様と婆堵羅様は二つの卵を森に残し死んだ…そう私達は聞いたわ」
「……もしかしてその卵というのが…」

「ええ、この社で祀られている神様です」
階段を降りきり、球子と杏が辿り着いたのはとても大きな二つの卵が安置された祭壇らしき場所だ。
「これが私／僕達一族が代々崇め護ってきた愛媛の守護神　最珠羅様と婆堵羅様よ／です」
そう言って卵の前に立つ安芸姉弟。祭壇の上に鎮座された二つの卵。それを思わず見入ってしまう球子と杏。
「で、デカイなぁ…オムレツ何個作れるんだ？」
「タマっち先輩、これは蟲の卵だからオムレツは出来ないよ…」
球子の言葉を聞いて、一瞬卵がビクッと震えた気がしたが気の所為だろう。
「そうだ、まだ貴女達の名前聞いてなかったわね」
「あ、わたしは伊予島　杏です」
「タマは土居　球子だ」
「……私は15歳だけど歳は？」
「え、14ですけど」
「同じく」
「ふうん、14…ねぇ」

真鈴は杏をジロジロと眺める。主に胸の部分を。
「……１４なのに発育いいわね…揉んでいい？」
「何真剣な眼差しで言ってるんですか!?」
手をわしゃわしゃさせてそう懇願する真鈴に両手で胸を覆う杏。球子は「あ、こいつタマと同類だ」と感じ取った。大樹は頭を抱えた。
「まあ、１０％の冗談は置いておいて…本題に入るわね」
「９０％本気だったんですね?!」
「姉様は黙ってて下さい。こほん、早速ですが二人にお話したい事があります。それは世界の命運がかかった大事な話です」
「い、いきなり話が大きくなったな」
馬鹿姉（真鈴）を蹴飛ばして大樹が代わりに本題を話し始める。
「僕達安芸一族には「太平風土記」という予言書があります。そこにはこう書かれているのです「天災の日来たりし時、天から災いの獣、来らん。そして最珠羅と婆堵羅と絆結びし乙女が獣を退けん」と」
「災いの…獣？」
「ええ、僕等の一族はそれを怪獣と呼びます。そしてその予言の日というのが…今日です」

「「今日!?」」
「ええ、だから安心してるのよ。ギリギリだけど最珠羅様と婆堵羅様の盟約者が見つかって」
　その災いの獣…怪獣とやらが現れる日が今日だと言われ驚く二人。
「いきなり過ぎないか!?説明されてすぐなんて流石に無理だぞ!」
「そうです!小説じゃないんですからいきなり戦えなんて言われても…」
「……悪いですけど、四の五の言ってる暇はないようですよ」
　慌てる二人に対し、大樹は冷静な顔でそう呟く。その瞬間大地が大きく振動し地下室が大きく揺れる。
「きゃ!?」
「な!?じ、地震か!?」
「……大樹」
「ええ、来たようですね」
　安芸姉弟は悟る。これは地震ではなく予言に記された天災の日だと。

　すぐに地下室の階段を登り、社から出て森の中を走り森の外へと出る。そして四人が目にしたのは炎上し、煙が上がっている町だった。だがそれよりも四人の意識が向いた

のは街の中で暴れ回る二体の怪獣だった。
ーーーピギィィィィィィィィッ！ーーーー
ーーーーガイギィィィィィィッ！ーーーー
「な、なんだあいつら!?」
その二体は共に同じ青色の体色で、全身刺々しい身体をしている。一体は鋭い一本の角に三つの口を持つ怪獣。もう一体は二本の角を持ち間抜け面の怪獣だ。
「……ありました。この太平風土記にあいつらに似た姿の怪物が描かれています。名は兄鬼　布邏頭魔（プラズマ）と弟鬼　儛儺頭魔（マイナズマ）…どうやら兄弟みたいですね」
怪獣達の名は合体怪獣　プラズマと合体怪獣　マイナズマという兄弟怪獣だ。二体は咆哮を轟かせプラズマは胸の二本の角から白色光線を、マイナズマは二本の角から青色光線を放って街を炎上させる。
「ま、街が……！」
「不味いですね。盟約者が見つかったとはいえまだ卵は孵化していないのに…」
自分達が住んでいる街が怪獣に蹂躙されるのを見て顔を青ざめる杏。大樹はまだ卵が孵化していない事に軽く舌打ちする。
「こうなったら無理やり卵を孵化させるしか…」
「いえ、そうすると未熟児になります。仕方ありませんがこの方々を社に匿いましょう。

結界のおかげであそこなら匿う事が…」
　もう無理やり孵化させるしかないと真鈴が呟くが、それで未熟児になってしまったら元も子もないと大樹は首を振り、杏と球子を神社に隠すことを提案する。だが、それに対し球子が声を上げる。
「ちょっと待て！街のみんなはどうなるんだ!?」
「……見捨てる他ないでしょう」
「大樹!?何を言って…」
「怪獣に勝てるのは最珠羅様と婆堵羅様の子達だけです。いずれこの世は怪獣達の巣窟となります。折角の世界を救う切り札を失うのは愚策です。残念ですが町の人達は諦め…」
　諦めよう、そう大樹が言おうとすると球子が彼の襟首を掴む。
「巫山戯るな！見捨てるのか!?町のみんなを！」
「タマっち先輩!?」
「……そうです、ここで未熟児な個体を孵化させるより、完全体である個体の方が世界を怪獣から守る事が…「そんな事知らん！」!?」
　大樹の言葉を遮る様に球子は大声を上げる。
「タマには世界を救うだとか難しい事は分からん！でも、それと町のみんなを見捨てる

のは違うだろ！それに目の前の命を助けずに見捨てる奴が世界を救えるなんてタマは思わない！」
「で、ですが…！」

球子の言葉を聞いて押し黙る大樹。そして杏も球子の言葉を聞いて口を開く。
「……わたしもそう思います。わたしも世界を救うだとかそんな難しい事は未だに理解できないけど…ここで皆を見捨てたら…世界も救えない気がするんです」
「……成る程、やっと分かったわ。こんな子達だから…あの子達もこの子達を選んだのね」
杏の言葉を聞いて、真鈴は笑みを浮かべた。やっと卵が何故この二人を選んだのか分かった気がしたからだ。
「でも、どうやってあの怪獣達を…」
大樹がそう言いかけた、まさにその時だ。地面が激しく揺れ、地面から何かが出現したのだ。
ーーーキュアアッ！ーーー
ーーーピギュアアォォォッ！ーーー
現れた二体の怪獣…一体は茶色の芋虫…頭部が大きく、後ろが小さい為クロワッサン

にも見える可愛らしい怪獣。もう一体は鋭い角に漆黒の外殻、身体の各部に刺々しい棘が生えた恐ろしい怪獣。そんな二体が地中から現れたのだ。

「そんな…!?自らの意思で孵化したのか!?」

地中から出現し、街中で暴れ回るプラズマとマイナズマの元へと這って進む。

ーーーキュアァッ!!ーーー

ーーーピギュアアォォォッ!ーーー

一生懸命地面を這って兄弟怪獣の元へ向かう双子の守護神。それを見て真鈴が球子と杏に向けて口を開いた。

「……杏、球子。このままじゃあの子達はあの怪獣に勝てないわ」

「!?」

「守護神の子とはいえまだ幼虫…正直あの兄弟怪獣には勝てるか分からないわ…ええ、あの子達だけならね」

そう言って真鈴は懐からある物を取り出す。それは鏡と似た形状をした物だった。

「これは『エリアスの盾』。呉爾羅と魏怒羅を封じた祭具であり、最珠羅と婆堵羅の力を増す乙女が持つ神具…さあ、これを受け取りなさい。あの子達と盟約を交わしあの怪獣達を倒すのよ」

真鈴がそう言ってエリアスの盾を球子と杏へと差し出し、二人は同時にエリアスの盾

を掴む。するとエリアスの盾が激しい光を放ち、鏡に似た形状が溶け、二つの青色の縦長の機械　バトルナイザーとなり二人の手に握られていた。
「これは……？」
「機械……？」
「さあ、行きなさい守護神に選ばれた乙女達。それこそ盟約の証。貴女達の力で悪逆を尽くすあの怪獣に裁きを与えなさい！」
バトルナイザーを握った瞬間から何をすべきか理解している。二人は二体の幼虫の姿をした怪獣達の方を見る。彼と彼女も球子と杏の…自分達の盟約者の指示を今か今かと待っていた。
ーーーさあ、早くしろ小娘。俺の名を叫び、指示を出せーーー
ーーー行こうよ私のパートナー。私の名前を早く呼んでーーー
「……ああ。行くぞあんず」
「……うん。行こうタマっち先輩」
声が聞こえた。球子と杏はその声に頷き、バトルナイザーを構え叫ぶ。自分達の相棒の名を。
「行けバトラ！あいつらを倒してくれ！」
「お願いモスラ！町の皆を守って！」

ーーーキュアァァァッ！ーーーー

ーーーピギュアアォォォッ!!ーーー

二人の少女の声に応じた怪獣達…バトラとモスラは大きな声で啼き、バトラは両眼からプリズム光線を、モスラは腹部から放つビーム　プチ・レールガンをプラズマ・マイナズマへと放ち二体の身体に命中し激しく火花が散った。

ーーーピギィィィィィィッ!?ーーーー

ーーーガィギィィィィィィッ!?ーーーー

モスラとバトラの攻撃を喰らい、驚きの声を上げる兄弟怪獣。すぐに自分達を攻撃した存在を見つけ、怒りの目を向けモスラとバトラへと突進する。

「バトラ！とにかく攻撃してくれ！」

ーーーピギュアアォォッ！ーーーー

バトラは球子の指示通り先程同様に両眼からプリズム光線を、更に天を穿たんばかりに伸びた角から放電を放ちプラズマとマイナズマの進行を止める。

ーーーピギィィィィィィッ!?ーーーー

ーーーガィギィィィィィィッ!?ーーーー

バトラの猛攻に怯む兄弟怪獣。バトラは攻撃の手を緩める事なく、両眼と角からプリズム光線と放電を放ち二体を攻撃し続ける。

「モスラ！貴女は姿を消して！」

ーーーキュアァァッ！ーーーー

モスラはプリズム状の組織で構成された自らの皮膚で周囲の光景に擬態するフェイク・リフレクションを行い、自らの姿を隠した。

ーーーピギィィィィィィッ!!ーーーー

ーーーガィギィィィィィッ!!ーーーー

突然プラズマとマイナズマも白色光線や青色光線を放って応戦するも、バトラのプリズム光線や放電に相殺されバトラに届かない。そして二体はモスラがいない事に気付き怪訝な顔をし…直後、虹色の糸で全身を絡め取られた。

ーーーピギィィィィィィッ!?ーーーー

ーーーガィギィィィィィッ!?ーーーー

ーーーキュアァァァァッ!!ーーーー

「やった！」

拘束され戸惑うプラズマとマイナズマ。そして兄弟怪獣の背後に現れ勝ち誇った様に鳴き声を上げるモスラに自分が考えた作戦が上手くいき喜ぶ杏。

「よし！これであいつらの動きは封じたな！流石あんずだ！」

「違うよタマっち先輩。わたしはただ作戦を考えただけ。モスラがいなかったらわたし

は何にも出来なかったもん」
「それもそうだな。ありがとなモスラ！」
ーーーキュアァッ！ーーー
そう二体を縛った虹色の糸はモスラが口から吐き出した糸　エクセル・ストリングスという拘束技だ。この糸は強酸を含んでいる為触れているだけで激痛が走り兄弟怪獣は皮膚が酸で焼け爛れていた。
「よおし、バトラ！あいつらが動けない間にどんどん攻撃だ！」
「モスラもプチ・レールガンでバトラの援護をお願い！」
ーーーピギュアアォォッ！ーーー
ーーーキュアァッ！ーーー
身動きの取れない今が好機と言わんばかりにバトラとモスラはプラズマとマイナズマに攻撃を集中させる。プラズマ光線とプチ・レールガンの嵐に兄弟怪獣は火花を散らしながら翻弄される。
ーーーピギィィィィィィッ!?ーーー
ーーーガィギィィィィィッ!?ーーー
モスラが吐いた糸の拘束はどんなに足掻いても千切る事は出来ない。どれだけ力を込めても破壊する事が出来ないのだ。

ーーーピギィィッ……ピギィィィィィィィッ!!ーーー
ーーーガィギィッ……ガィギィィィィィィィッ!!ーーー
プラズマとマイナズマは理解した。バトラとモスラ（目の前の敵）は強敵だと。このままでは負けてしまう。故にプラズマとマイナズマはお互いの顔を見合わせ、自分達の奥の手を使う事にした。
ーーーピギィィィィィッ!!ーーー
ーーーガィギィィィィィッ!!ーーー
プラズマは一本角からプラス電撃光線を、マイナズマは二本の角からマイナス電撃光線を互いへと放ち互いの身体をくっつけ合う。それにより二人を縛りつけていた糸が合体の際に生じたエネルギーで消滅した。
ーーーピギィィィィィィィッ!!!／ガィギィィィィィィッ!!!ーーー
「「「く、くっついた!?」」」
ーーーキュアァァッ!?ーーー
ーーーピギュアアォォォッ?!ーーー
単に背中合わせにくっついているだけなのだが、これにより＋エネルギーと－エネルギーが合わさり身体能力が何倍にも強化され、死角がなくなるのだ。
ーーーピギィィィィィィィッ！／ガィギィィィィィィッ！ーーー

プラズママイナズマは唸り声を上げ、プラズマを前にしてモスラとバトラへと突進する。バトラは両眼と角からプリズム光線と放電を放つも、強化された肉体はそれらの攻撃を受け付けない。モスラが吐いた糸も腕力だけで無理矢理引きちぎってしまう。
「そんな!?モスラの糸が……!?」
「単にくっ付いただけなのに無茶苦茶強くなってないかあいつら…!?」
先程まで通用していた攻撃が通用しなくなり戸惑う球子と杏。その隙を逃さずプラズママイナズマはバトラとモスラに破壊光線　シンセサイズレーザーを発射、バトラとモスラは光線により吹き飛ばされ宙を舞い地面に叩きつけられる。
ーーーキュアァッ!!?ーーーー
ーーーピギュアアォッ!?!ーーーー
「モスラ!?」
「バトラ!?」
地面に倒れる相棒達に叫び声を上げる二人。それを見て大樹は舌打ちする。
「くっ……やはり未熟児では……!」
「いえ、まだよ。あの二人を信じなさい」
真鈴は弟を宥めながら球子と杏を見つめる。確かにバトラとモスラだけでは勝てないかもしれない。だがあの二人がいれば勝てる。そんな確信が真鈴にはあった。

「まだだ！立ち上がれバトラ！」
「頑張ってモスラ！」
ーーーピギュアォォッ……ピギュアアアアォォォォォッ!!!ーーーー
ーーーキュアァッ……キュアアアアアアアアアアアアッ!!ーーー
盟約者の声を聞きバトラとモスラは雄々しい啼き声を上げ、プラズママイナズマを睨む。
ーーーピギィィィィィィッ！／ガイギィィィィィィッ!!ーーー
プラズママイナズマはバトラとモスラにシンセサイズレーザーを発射。被弾せずとも地面にぶつかった衝撃で土塊が吹き飛び双子の進路を妨げる。
（バトラの光線だけじゃあいつらは止められない）
（モスラじゃ火力不足であの怪獣達を倒せない）
（ならバトラだけじゃない。モスラの力も借りればいいんだ）
（あの怪獣達みたいに力を合わせれば…倒せる）
プラズマとマイナズマと同じ様に、バトラとモスラも力を合わせればプラズママイナズマに勝てる。そう二人は思考する。
（タマ／わたしとあんず／タマっち先輩が力を合わせれば絶対に勝てるっ!!）
球子と杏は同時にバトルナイザーを前へとかざす。示し合わした訳でもない。ただ

会話せずとも、目を合わせたりせずとも互いの考えてる事を理解した、それだけである。
「「行け！バトラ／モスラ!!!」
ーーーピギュアアォォォッ!!ーーー
ーーーキュアァッ!!ーーー
盟約者達の叫びを聞き、バトラとモスラはプラズママイナズマへと突進。二体同時に体当たりをプラズママイナズマに命中させ後方へ押し飛ばす。
ーーーピギィィィィィィッ!?／ガィギィィィィィィッ!?ーーー
ーーーピギュアアォォォッ!!!ーーー
ーーーキュアァァァァァッ!!!ーーー
プラズママイナズマの態勢が緩んだ今が好機と言わんばかりにバトラとモスラが鳴く。バトラは角にエネルギーを収束し、赤色に輝く光線　プリズムシュートを、モスラは腹部から極太の光線　スパークリング・パイルロードを放ちそれを重ね、合体光線と化しプラズママイナズマを穿たんと二重螺旋を描き直進する。
ーーーピギィィィィッ!?／ガィギィィィィッ!?
ーーー
プラズママイナズマは慌ててシンセサイズレーザーを放つ。だが双子の合体光線に破壊光線は押され、合体光線が破壊光線を打ち破りプラズママイナズマの身体を穿つ。

ーーーピギィィィィィィッ!!?ピ……ギ…ィィ…ィィィ……ィ……ッ…／ガィギィィィィィッ!?ガィ…ギィィィ……ッ……ーーー

合体光線によりプラズマもマイナズマも身体のほぼ半分を消し飛ばされ、兄弟怪獣は当時に後ろに倒れ爆散する。

「「やった!!」」

ーーーピギュアアォォォッ!!ーーー

ーーーキュアァァァッ!!ーーー

プラズマとマイナズマを倒し喜ぶ二人と二匹。大樹も安堵の息を吐く。

「やったなあんず!モスラの後押しのお陰で勝てたぞ!」

「ううん、タマっち先輩とバトラのお陰だよ。わたしとモスラだけじゃきっと勝てなかったから」

「じゃあタマとあんず、バトラとモスラの協力プレイて事で全員の手柄だな!」

ーーーピギュアォッ!!ーーー

ーーーキュアァァッ!!ーーー

そう笑い合いながら喋る球子と杏、初めての勝利に喜び顔を首をリズムよく揺らすバトラとモスラ。

「ね、なんとかなったでしょ?」

「ええ……その様ですね」
　真鈴は弟の肩に手を置き、笑みを浮かべる。それを見て大樹も微笑み…すぐに表情を硬くする。
「ですが…愛媛にも怪獣が現れたという事は…」
「そうね。他の場所にも怪獣が当然現れてるんでしょうね」
　予言では怪獣が現れるのは愛媛だけではない。世界中に怪獣が現れている筈だ。今倒したプラズマとマイナズマも数多の怪獣達の氷山の一角だ。
「早く球子さんと杏さん以外の怪獣との盟約者達を探さないといけませんね」
「そうね……はぁ、予言に書かれた怪獣との盟約者の数は八人…それが全員四国にいる、ていう展開はないのかしら?」
「流石にそれはないと思いますよ姉様」
　初勝利に喜ぶ球子達を他所に、球子と杏以外の六人の怪獣使いを探さなければならないのかと溜息を吐く真鈴…まさかこの時は八人の怪獣使いの内、五人が四国出身だとは彼女は夢にも思わなかった。

少女は王と出会った

「王」は目覚めた。海の底で深き眠りについていた王は瞼を開き唸りを上げる。王は悟ったのだ、この星に迫る危機に。そして同時に王はこう思った　「どうでもいい」、と。

王は守護神であるが同時に憎悪と恨みの化身　怨霊神でもある。その身はかつては人だった…いや、単なる人ではない。昔この国に存在した王の一人だった。だが、それを王の父は、人々は認めなかった。

そして王は王の座を奪われ、自らを信じた家臣達を失い、愛しい者達と引き離された。そして贖罪と来世の救いを払いのけられ、王は怒りに身を任せ魔道へと堕ちた。そして同じく王ながらも「源氏」という者達に滅ぼされ海に沈んだ若き王を龍神と化し、その肉体を取り込んで魔王となった。

王は自分を認めなかった者達にその憎悪と怒り、恨みをぶつけ都を焼き払った。このまま我が国など、世界など滅んでしまえと願った。だが、そんな王でも捨てられなかったものがある…それが彼を王として認め、慕った民とその民が住む場所…四国。

唯一王を王と認め、慕ってくれた愛すべき者達。それを王は捨てる事が出来なかった。王が完全に魔道に堕ちなかったのはその者達がいたからだろう。世界は滅ぼした

い、だが四国だけは護りたい。そんな矛盾に王は揺れ動いた。
そんな王に天の神と地の神は話を持ちかけた。怒りを鎮めれば王を四国の守護神にすると。王は神々のその言葉を聞き怒りを鎮め四国を守護する神となったのだった。
故に王は四国以外が滅ぼうが一切気にしない。寧ろ四国以外など滅べ、と笑っていた。だが四国の民を見捨てる事は出来なかった。王は四国のみを愛している、故に王は動いた。目指すは四国…ではない。四国には旧知たる守護神の幼子がいる、わざわざ王が向かい守る必要はない。ならば王は何処へ？
王が向かったのは神々の地　出雲…つまり島根。そこに四国の民の気配を王は感じたのだ。王は急いだ、自分が治める国の民を護る為に。

島根県にあるとある神社。そこで修学旅行で島根県に来ていたとある中学校の生徒達が境内でキャンプファイヤーをしたり、晩御飯を食べていたりと楽しんでいた。
「やはりうどんと親鳥は美味いな」
「島根に来ても食べるのはうどんなんですね…」
「当然だ。うどんは国民食だからな」
そう言ってうどんを啜り、親鳥の骨付鳥にかぶりつくアメジストの様な紫の瞳に薄茶色の髪をポニテールにした少女　乃木（のぎ）　若葉（わかば）と島根に来てもブレない彼女に半笑いを

浮かべるのか彼女の幼馴染の上里（うえさと）ひなただ。
「それはそうと若葉ちゃん。さっきクラスメイトの方に聞いたんですが…これを見てください」
「ん？」
うどんを啜る若葉の前にひなたはスマホを突きつけてある画像を見せる。その画像は…
「……何だこれは？」
「何でも今日香川に現れた謎の巨大未確認生物…らしいですよ」
「……合成か？それとも何かのＣＭか？」
ひなたのスマホに映っていたのは巨大な黒い生物や虫の幼虫に似た姿をした二体の怪獣の画像だ。若葉はこれを合成写真か何かかと問い、ひなたが首を横に降る。
「いいえ、どうやらそれ本物のようですよ？さっきネットの方で検索したら…ニュースにもなっていたようですし」
「……馬鹿らしい。この世にこんな巨大な生き物がいる筈ないだろう。それにいたとしても何処ぞの研究員やら専門家が見つけている筈だ」
「……ロマンがないですねえ若葉ちゃんは」
「私はそういった類はあまり信じないんだ。妖怪だとか神だとか、天使みたいな存在は

信じないし、ＵＦＯだとかＵＭＡみたいな存在も信じないからな」
若葉はあくまでその画像は偽物だと決めつけ、うどんを啜る。そんな幼馴染に溜息を吐くひなた。そんな時だ、キャンプファイヤーを楽しんでいた生徒の一人がふとこんな声を漏らした。
「あ、あれなんだ？」
男子生徒の一人が指差した先には白く発光する謎の光が空の上に浮かんでいた。
「ＵＦＯか？」
「え!?マジかよ！ヤベェ写真とろ！」
「飛行機じゃないわよね…じゃあ隕石？」
生徒達が謎の光を見てそうざわざわと騒ぎ出す。若葉とひなたは黙ってその光を見つめていた。
「……若葉ちゃんがＵＦＯなんていない！て断言してから来るなんてタイミングいいですねぇ」
「……」
何でＵＦＯ完全否定してから来るのかと若葉は俯く。そんな若葉を見て写真を撮るひなた。
「……ねえ、あの光…こっちに近づいて来てない？」

「……あ、本当だ」

だんだんとＵＦＯが空から地上に近づく…というより若葉達がいる神社に向けて降下していると全員気づいた。

「!.お、お前達…!.とりあえず逃げ……」

ＵＦＯを見て呆気にとられていた教師の一人が危険を察して生徒達に逃げる様に言おうとするが…その言葉がちゃん言い終わる前にＵＦＯから複数の光線が放たれ、そこから装甲甲冑を装備し拳銃や警棒を持った無数の兵士達が現れ、生徒達や教師達を取り囲んだ。

「!?.こいつらは……!?.」

突然現れた兵士達に若葉は近くに武器になりそうな物を探そうとするが、若葉の動きを見た兵士の一人が若葉に拳銃を向け、もう一人が若葉のクラスメイトの一人に銃口を向ける。

「くっ……動くな、という事か」

「若葉ちゃん……」

若葉もひなたと一緒に兵士達に取り囲まれ、兵士達に誘導され他の生徒や教師達と共に一箇所に集められる。そしてＵＦＯが地面すれすれの所で静止し、ＵＦＯからロボットが現れる。

「やあ、初めまして偏狭な星のお猿さん…おっと、言い間違えました。地球人の皆さん」
「……宇宙人？」
「ＹＥＳ、その通り。わたくしはチブル星人　ゼブマ。チブル星の最高の頭脳にして宇宙の偉大なる科学者です」
　否、ロボットではない。チブローダーというパワードメカに乗った大きな頭に短い３本の手足を持つ珍妙な宇宙人…チブル星人　ゼブマが若葉達ににこやかに、されど傲慢に話しかける。
「ああ、心配しないで欲しい。別にわたくしは君達を殺しに来た訳ではないのだよ。私は他の宇宙人の様な脳筋ではないからね」
「な、何をしに来たんですか？」
　教師の一人が勇気を振り絞ってゼブマに話しかけてみる。するとゼブマは不気味な笑みを浮かべる。
「ミスターの質問に答えよう。実はわたくしは宇宙生物…怪獣同士の合成にはまっていてね」
「は、はぁ？」
「でもねぇ、中々知能が高くなくてね…そこで考えたのだよ。そこそこ頭脳が高くて、調教しやすそうな生物の頭脳を取り入れれば扱いやすく出来るのではないかとね」

「そ、そうですか…それが私達と何の関係が？」
「いい質問をしてくれたミスター。わたくしは君達　人間の脳味噌が欲しいんだよ」
『!?』
　ゼブマの言った一言に凍り付く一同。ゼブマはさも気にしていない様に笑いながら言葉を続ける。
「人間ていう生き物は我々チブル星人と比べると非常に馬鹿で、阿保で文明が遅れた猿だが…他の宇宙人よりは捕まえやすいし、何より痛めつければ言う事を聞く。特に子供なんかが実験材料に適してると私は思うんだ」
　ゼブマは人間を実験材料、もしくはモルモットとしか見ていない。全員が察した。もしこいつに捕まれば死ぬより恐ろしい目に合わされると。
「ああ、チブロイド達。もし抵抗した場合は心臓を撃ち抜いてくれ。最悪脳さえあればいい、どうせこの猿達の脳以外の怪獣の餌になるからな」
　そう兵士達…傀儡怪人　チブロイドに命令するゼブマと創造主の言葉に頷くチブロイド。だが、こんな暴挙は見逃せる筈がないと一人の教師が立ち上がる。
「ま、待ってくれ！それなら僕が実験材料とやらになる！だから子供達だけは…」
　見逃してくれ、そう言いかけた教師の肩に銃弾が命中し鮮血が舞った。
「がぁ!?」

「!?せ、先生!?大丈夫ですか!?」
　チブロイドに銃で撃たれ、肩を押さえる教師に駆け寄るひなた。それを見てゼブマが舌打ちする。
「チッ、下等でクズで脆弱で猿に似たゴミが。このわたくしと話しただけで不愉快なのに…対等に話そうなんておこがましいんですよ」
　先程の紳士じみた態度から豹変し、ゴミを見る目で若葉達を見るゼブマ。そう、彼は他のチブル星人と同じく自分以外を見下す傲慢な性格なのだ。
「貴様ーーーッ!」
「……なんですか、その目は。どうやら立場で物が分かってないみたいですね…いいでしょう。わたくしの恐ろしさを教えてあげましょう」
　若葉がゼブマを睨む。それを見てゼブマは気分を害しＵＦＯから光を放ち、ある装置を神社の境内に出現させる。
「なんだ…?」
　それは六つのカプセルに似た容器が収められた装置だった。五つの機械には何かの肉片や細胞が安置されており、最後の一つには青色の宝石が収められていた。それが若葉には悍ましい何かに見えた。
「ふふふ…これは合成装置。五つの怪獣の細胞と一つの鉱石から新たな怪獣を誕生させ

る機械です」
「かい、じゅう?」
「おっと、無知で愚かな猿共に説明するのを忘れていました!まずはこれから誕生する新生命の素材となる怪獣達についてご説明してあげましょう!」
そう自慢するかの様にゼブマは笑いながら合成装置にいれた肉片や細胞について説明し始める。
「まずは一番右端にある細胞は超古代怪獣　ファイヤーゴルザ!その隣にある肉片が超古代竜　メルバ!中央にある甲殻が宇宙海獣　レイキュバス!一番左の目玉が奇獣ガンQ!そしてその隣の黄金のカマが宇宙戦闘獣　超コッヴ!そしてとある地球で取れるエネルギー鉱石　ビクトリウム!これから私の最強の怪獣が誕生するのです!」
そう嬉々として説明するゼブマ。若葉にはゼブマが言った言葉全てが理解できなかったがそれが背徳かつ道徳に背いた行為だとは理解できた。同時に危険を察した。
「さあ!感動しなさい!これが新たなる生命の誕生の瞬間!精々ミジンコ程もないその低脳な頭でこれから起こる奇跡に平伏しなさい!」
そうゼブマが言うとカプセルの中の肉片達が様々な光を放つ。ファイヤーゴルザは赤色、メルバが黄色、ガンQは紫、レイキュバスはピンク、超コッヴはオレンジ、ビクトリウムは青色の光を上空に向けて放って光が重なり合う。

「さあ、生まれ出でよ最強の合体怪獣！ファイブキングゥゥゥゥゥゥゥッ!!!!!」
光が収束し、それが街へと落下。そして光の球が消えるとそこには巨大な怪物が立っていた。
ーーーゴシィィィィィッゴガギィィィィッギィィィィッガギィアァァァァッ
イアヒャアヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!!!!ーーー
それは文字通りの合成獣（キマイラ）だった。蟹に似た生物の頭部を模したレイキュバス（右腕）、巨大な眼球を模した不気味なガンQ（左腕）、下半身には超コッヴ（生物）の顔が、背中に生えたメルバ（翼）、背部には背びれの様にビクトリウム（水晶）が生え、それらの生物達や鉱物の優れた特徴が複合されたファイヤーゴルザ（基盤となる怪獣）が街に君臨したのだ。
「見ろ！あれが私の最高傑作！完璧な殺戮兵器！至高なる我が僕　五大王（ファイブキング）だぁぁぁ!!」
培養合成獣　ファイブキング。それがこの怪獣の名である。ファイブキングは咆哮を轟かせながら街を見渡し、邪悪な笑みを浮かべて建物をその右腕を振るい破壊する。ファイブキングはまだ生まれて間もない赤子だが怪獣としての本能で理解しているのだ。街を壊せと、何故なら自分は邪悪なる化身　怪獣なのだから、街を壊すのか道理なのだと。自分の本能のまま街を破壊して欲望を満たせと理解していた。
ーーーゴシィィィィィッゴガギィィィィッギィィィィッガギィアァァァァッ
イアヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!!!!ーーー

「暴れろファイブキング！貴方の凄さをこの下等生物達に見せつけるのです！」
ーーーゴシィィィィィッゴガギィィィィィッギィィィィィッガギィアァァァァァッ
イアヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!!ーーー
ゼブマはそうファイブキングに命令し、ファイブキングは指示通りに超コッヴの下半身から光弾をガトリングガンの様に発射。更にはレイキュバスの鋏から炎と氷が合わさった光線を、ガンQの目からはガンQビームを、頭部からはゴルメルバキャノンを放ち街を破壊し炎上させる。
「やめろ！」
「アヒャヒャ！聞こえませーーん！」
若葉が叫ぶがゼブマは嘲笑するのみ。チブロイド達が拳銃を向けていては歯向かう事も出来ない。若葉にはただゼブマを睨む事しか出来ない。
「…その目気に入りませんねぇ。ファイブキング。やっぱりこいつらを実験材料にするのはやめです。ここで殺してしまいましょう」
ーーーゴシィィィィィッゴガギィィィィィッギィィィィィッガギィアァァァァァッ
イアヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！ーーー
ファイブキングは地響きを鳴り響かせて若葉達の元へと近づく。そして低い唸りを立てて若葉達を上から見下ろす。

「さあ！こいつらを殺してしまいなさい！」

ーーーゴシィィィィィィッゴガギィィィィィィッギィィィィィィッガギィアアアアアアッ

イアヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！ーーーー

「くっ……」

「若葉ちゃん……」

ゼブマはテレポート機能を使い、自分だけＵＦＯの中へと帰還し、ファイブキングに若葉達を鏖殺しろと命令を下す。その言葉に従いファイブキングはゴルメルバキャノンを放とうとし生徒達は死を覚悟して眼を瞑る。その時だった。

ーーーキィィィィィィィィィィィィアアアアッ!!ーーーー

ーーーゴシィィィィィィッゴガギィィィィィィッギィィィィィィッガギィアアアアアアッ

イアヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!?!!ーーーー

「な、なにぃ!?」

地中から新たな怪獣が出現し、その怪獣が顎から雷撃を発射しファイブキングに命中。火花を散らしながらファイブキングは吹き飛ばされゼブマは眼を見開いた。

「わ、私のファイブキングが!?ば、馬鹿なありえん！」

ゼブマは最高傑作が一撃で吹き飛ばされた事に激しく混乱する。対して謎の怪獣は金切り声の様な不気味な咆哮を轟かせる。

ーーーキィイイィィィィャァァァッ！ーーーー

「……龍？」

若葉が呟いた言葉通り、その怪獣の姿は龍に酷似していた。龍というよりかは蛇。血の様に紅に染まった眼に赤く輝く結晶体の角、腹には六個の紅い眼に見える模様。背中には翼にも見える突起物が。血の池地獄の様に真っ赤に染まった体色には所々黄金の様に輝く金色の箇所がある。

その姿はまるで日本の皇祖神たる天の神の女神の象徴たる蛇を表しているかの様。そしてその翼は妖怪の王たる天狗の如し。そして最強の怪物　八岐大蛇を連想させる威圧感。正に王。若葉はそう感じた。

「ええい、忌々しい。たかが野良の怪獣が調子に乗りおって…蹴散らせファイブキング！」

ーーーゴシィィィィィィッゴガギィィィィィッギィィィィィッガギィアァァァァッィアヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!!!!ーーーー

ファイブキングは憤怒の咆哮を轟かせ、ゴルメルバキャノン、ガンQビーム、炎と氷の光線、光弾の速射を放ち怪獣に放つ。怪獣はそれを避けるそぶりすら見せずファイブキングの攻撃に命中…その身体には傷一つなかった。

「ば、馬鹿な!?あれだけの攻撃を食らって無傷だとぉ!?」

ーーーゴシィィィィィィッゴガギィィィィィッギィィィィィッガギィアァァァァッ
イアヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!?ーーー
ーーーキィィィィィィィィャァァァッ!!ーーー
気が済んだか？と言わんばかりに怪獣は低く唸ると肩を怒らせファイブキングへと突進。ファイブキングは後方へ後退りゴルメルバキャノンを至近距離で放つがやはり傷一つつかない。
「なんて硬い身体なんでしょう…」
ひなたはただ圧倒された。他の者達も同じくその怪獣の強さに圧倒されていた。
ーーーキィィィィィャァァッ……ーーー
ふと怪獣が若葉達の方を向いた。そして首を動かし早く逃げろと言っている様な仕草をする。
「逃げろ、と言っているんでしょうか？」
「……そうかもしれんな。よし、あの怪物が何かは知らんが皆逃げるぞ！」
若葉の声を聞い全員がその場から逃げ出そうとするとチブロイド達が拳銃を向ける。
「ここから逃げられると思っているのかお前達！私は今猛烈に怒っている！お前達に八つ当たりしたい程になぁ！」
絶対に逃すかと叫ぶゼブマ。その声を聞きチブロイド達が指示（コマンド）に従って銃の引き金

を引こうとする。

ーーーキィイイイイイヤァァァッ！ーーー

怪獣が金切り声に似た咆哮を轟かせるとその尻尾から虹色の光が浮かび上がる。その虹の光は若葉の元へと放たれ、彼女の目の前の地面に突き刺さった。

「！……これ、は…？」

彼女の目の前に突き刺さっていたのは一本の剣だった。その形状は蕨手刀で刀身は虹色に輝いていた。怪獣は低く唸る、それを使えと。

「……」

若葉はその剣を手に取る。この剣はスサノオ、ヤマトタケルと言った偉大な英雄が使っていた剣だ。そして日本の王が所持する三種の神器の一つ。正確にいえばそれの原点。偽物（レプリカ）ではなく海に沈んだ神剣。その名は草薙剣、又の名を天叢雲剣という。

ーーーキィイイイイイヤァァァッ!!ーーー

自分の身は自分で守れ。そう言いたげに怪獣は唸るとファイブキングの方へと歩みを進める。若葉は一瞬だけその怪獣…王を一瞥し感謝の言葉を呟く。

「……感謝するマガオロチ！」

何故かその王の名をいつの間にか知っていた。あの怪獣の名は四国の守護神にして最恐の魔縁　大魔王獣　禍大蛇（マガオロチ）。天の神の血を引く怪獣だ。

「はぁぁ……!!!」

　若葉が天叢雲剣を振るう。たった一振りで地球上のあらゆる金属より硬い身体で出来たチブロイド達が両断される。

「な、な、な……!?そんな剣で私の手駒が!?」

　天叢雲剣、とある蛇の神の尻尾より見つかった剣。その神鉄は万物を裂き英雄を英雄たらしめる神具。それに加えマガオロチの全エレメントを操る力が加わった、いわば「虹の聖剣」。機械兵如きの装甲など紙も同然だった。

――キィイイイイイイイイヤァァァッ!――

　マガオロチは大口を開き、口からマガ迅雷と呼ばれる電撃を放つ。それを見てファイブキングとゼブマは嘲笑った。

（馬鹿め！ファイブキングには光線を吸収する能力がある。しかもその吸収した光線を二倍にして反射する！そのまま貴様は貴様の攻撃で死ね！）

――ゴシィイイイイイイッゴガギィイイイイイイッギィイイイイイッガギィアァァァァァッイアヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!!!――

　ファイブキングは左腕のガンQの部位からマガ迅雷を吸収。そのまま倍にしてマガオロチに反射した。

――キイイイイイイイイイイイヤァァァァッ!――

それに対しマガオロチはまたしても一切の防御や回避を行わず反射された自分の攻撃を喰らい、激しい火花が飛び散った。

「ゲヒャヒャヒャ！ザマァみろバーカ！この私に歯向かった罰だ！」

「そ、そんな……」

ゼブマが勝利を確信し、ひなたが絶望しかけた、まさにその瞬間。

ーーーキイイイイイイイヤァァァアッ！ーーー

「………ほぇ？」

ーーーゴシィィィイイッゴガギィィィイイッギィィィイイッガギィアァァァァッイアヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ？ーーー

爆煙が晴れるとそこには身体が少し焼けた程度の傷を負ったマガオロチが立っていた。

「……と、トリックだ。あいつはきっと何らかの攻撃の無効能力でも持っているんだ」

そうゼブマは判断した。そう思い込みたかった。

ーーーキイイイイイイイヤァァァアッ！ーーー

再びマガ迅雷を放つマガオロチ。今度もガンQの力で吸収し倍にして返すファイブキング。だがマガオロチはゆっくりと緩慢な動きで前に進み王者の風格を見せながら片腕で二倍になったマガ迅雷を防ぐ。

「……信じられない。自分の身体で防いだだと!?あの威力の光線をか!?」
　別に難しい話ではない。光線を吸収だとか反射だとかそういう小細工ではない。ただ身体の強度が異様に高いだけだ。
　そもそもマガオロチという怪獣は別宇宙では暴走した巨人にその尻尾を切り取られ、マガオロチが放ったマガ迅雷をその尻尾で防がれた。尻尾はマガ迅雷で爆発することはなく二度も雷撃を耐えきった。そう、マガオロチの身体は自身のマガ迅雷にも耐えうる強度を誇るのだ、たかだか二倍になったからといって破れるほどこの強靭な肉体は甘くない。
「く、クソが!聞いてない!聞いてないぞ!こんな辺境な星にこんな怪物がいるなんて!こうなったら!ファイブキング!戦略的撤退だ!」
　ーーーゴ、ゴシィィィィィッゴガギィィィィィッギィィィィィッガギィアァァァァッイアヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!!!!ーーー
　ゼブマの指示を聞き、ファイブキングはメルバの翼を広げ、空に輪っか状の稲妻が迸る暗雲を形成。飛翔しマガオロチから逃げようとする。
（あのフォルムから見てあの怪獣は空を飛べない筈です!なら逃げられ……）
　マガオロチには翼がない、だから飛べない。そうゼブマが結論付けようとした。だが、マガオロチは大魔王獣。そんな安い理論は通用しない。

ーーーキィイイィィィィィャァァァァッ!!!!ーーーー

「……へ？」

ーーーーゴシィィッゴガギィィッギィィッガギィァァァッイァヒャヒャヒャ??ーーーー

『……は？』

「……最早何でもありか」

マガオロチが空を飛んだ。それだけの事。それだけで若葉以外が目を丸くした。信じられないものを見たような顔をして。

ーーーキィイイィィィィィィャァァァァッ!!ーーーー

別宇宙のマガオロチの子には禍翼（マガバッサー）という風を操る翼持つ怪獣がいる。それの風を操るエレメントを使いマガオロチは身体を宙に浮かせる。だが、そんな事をしなくても翼を出せばいいのだ。マガオロチはマガオロチであって別宇宙のマガオロチではない。王は天狗なのだから黄金の鳶の翼を形成すればよいだけだ。

ーーーキィイイィィャァッ!!ーーー

黄金の翼を突起物から展開し、マガオロチは逃げようとしていたファイブキングに追いつきファイブキングの片翼をもぎ取った。

ーーーーゴシィィィッ……ーーーー

ファイブキングが何か叫ぶ前にマガオロチはマガ迅雷でレイキュバスの右腕を破壊

した。ガンQの腕は既にマガオロチの右手で眼球を潰した。次に超コッヴの部位を破壊し、ファイブキングは地に堕ちる。

「ふ、ファイブキング!?」

両腕を破壊され、まだもがこうとするファイブキングをマガオロチは蹴り飛ばす。翼が片方ないからもう飛べない。両腕がないから攻撃できない。だがマガオロチは許さない。四国の民を危険に晒した奴は例外なく殺すつもりなのだから。

ーーーキィイイイイィィャァァァッ!!ーーー

今までとは破壊力が比べ物にならないマガ迅雷を放ち、ファイブキングはせめてもの抵抗にゴルメルバキャノンを放つが軽々と押し切られ、ファイブキングの身体はマガ迅雷に身体や細胞を粉々に粉砕されながら爆散した。

ーーーゴシィィィィィッゴガギィィィィッギィィィィッガギィァァァァァッイァヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ!?ゴ……イ……ッ…ゴガ……イ…ギ…ッ…ガ…ギ…ァ……ャ……ヒャ……ーーー

「ば、馬鹿なぁぁぁぁ!?私のファイブキングがぁ!?」

ファイブキングを撃破され発狂寸前なゼブマ。そしてふと若葉達の様子をモニターで見て…目を見開いた。

「ち、チブロイド達が全滅しているだとぉ!?」

若葉達を取り囲んでいたチブロイドは全て若葉が天叢雲剣で斬り裂き、スクラップにしていた。若葉は一切の傷はなく、天叢雲剣は返り血の代わりにオイルで刀身が濡れていた。

「……お前の玩具は品切れか？」

ーーーキィイイイイイヤアアアッ…？ーーー

若葉が挑発するように笑みを浮かべ、マガオロチが挑発した声を出す。怒りでゼブマの身体が震える。

「お、おのれぇぇぇ!!畜生以下の猿と獣が調子に乗りやがって！私はチブル星一の頭脳の持ち主！これで終わると思っているのかぁぁぁ!?」

ゼブマはそう怒り狂ったように叫ぶ。まだ何か策があるのかとひなたが顔を硬らせる。まさかファイブキング以上の怪獣を出すのか…？

「……逃げろ！」

ＵＦＯはそのまま光を放って宇宙へと高速で逃げ去った。

「……逃げたな」

「……逃げましたね」

『……逃げた』

ーーーーキィイイイイイヤアアアッ……ーーー

マガオロチを含めた全員が絶句する。まさかあれだけ大見得切っておいて逃げるとか、流石に考えていなかった。

「くそ！くそ！くそ！くそ！くそ！くそ！よくも私に恥を書かせてくれたな！地球人と蛇め！この借りは何億倍にして返してやる！」

宇宙空間でそう叫ぶゼブマ。

「そうだ！チブル星に帰って仲間と一緒に機械兵軍団を作り出してやる！そして培養合成獣の群れを形成して地球なんか滅ぼしてやる！」

そう強がるゼブマ。彼は母性に逃げ帰って仲間に頼み込んで地球を攻め込むつもりのようだ。

「あの小娘とか怪獣は楽には殺さんぞ！怪獣は死ぬまで解剖して実験材料に！小娘は家畜の餌にしてやる！精々今は勝った気でいろばーか！」

宇宙一の頭脳だとかチブル星一の頭脳とか言っている割には子供みたいな言葉しか出さないゼブマ。そう笑っていた彼だが突然ＵＦＯ内に警報が鳴り響く。

「ん？なんだ？」

モニターに映し出された映像を見る。どうやらＵＦＯの背後の映像のようだ、モニターにはゼブマが乗るＵＦＯの背後に迫る雷撃が映っていた。

「……ほえ？」

そんな情けない声と共に、ゼブマはＵＦＯごと雷撃に飲み込まれ消滅した。

ーーーキィイイイイイイャアアアッ……ーーー

「……遠距離射撃、凄いなお前は」

マガオロチは宇宙（そら）に向けて雷撃を放ち、宇宙空間に逃げたゼブマのＵＦＯを見事に撃ち抜いたのだった。

ーーーキィイイイイイイャアアアッーーー

「む？私達を四国に送り届けてくれる？いいのか？さっきから助けてもらってばかりだが」

ーーーキィイイイイイイャアアアッーーー

「そうか、それなら頼む。何せこんな非常時だ、無事に四国に帰れるか分からんからな」

「……あの、若葉ちゃん？」

そう何かしらの会話をする若葉とマガオロチ、だが側から見ればマガオロチが何を言っているのか分からない。

「ん？どうしたひなた？」

「いや…その……分かるんですか言葉？」

「なんとなくな、言葉は分からないが…何故か理解できるんだ。ひなたは分からないのか？」
「ええ、全く」
　ん～と首を傾げる若葉。何故自分しかマガオロチの言葉を理解できないのかと首を傾げる。
「……まあいいか。とりあえずこいつ…マガオロチが私達を四国まで送ってくれるらしい。今すぐにでも送ってくれるらしいが皆は大丈夫だろうか？」
「……あの、どうやって四国まで行くんです？」
　そもそもだ、島根から四国（香川）までどうやって運ぶというのか。全員が聞きたかった事をひなたが尋ねる。
「マガオロチの手に全員で乗る。そしてマガオロチが歩いて四国まで行くか、空を飛んで四国に行くかだな。因みに後者の方が早く着くらしいぞ」
　ーーーキィイイイイイヤアアアッ！ーーーー
『……』
　若葉の言葉を聞いて硬直するひなた達。マガオロチが「どっち選ぶ？」と言いたげに低く声を上げる。
「……取り敢えず歩きましょう。私達の足だけで」

「え」

ーーーキィイイイイイイイヤァァァッ…？ーーー

いや、空から落ちたら死ぬし、うっかり握られて潰れて死ぬのも嫌だし。それが若葉以外の全員の意見だった。若葉とマガオロチはしょぼんとする。

かくして四国の王は出雲の地にて民を助けた。王の従者となった少女は剣にて怪獣を斬る者となったのだった。

少女は闇へと堕ちた

少女は何もかもが嫌いだった。他人の笑う声も、他人の幸せそうな顔も、自分にはないものを見るのが苦痛だった。

「……」

暗い部屋の中を照らす光は少女が持っているＰＳＰの画面の光だけ、少女の黒瞳（こくどう）には画面の光景しか見えていない。ＰＳＰのボタンを押す音だけが静寂の空間に響いていた。

少女は両親が嫌いだった。育てもせず愛情を注いでくれなかった両親を憎悪した。母親は自分と父親を捨てていなくなった。父親は子供が大人になったみたいな性格で自分の事しか考えていないような人間（クズ）だ。

そんな両親を持っていたからか、彼女は幼い頃から酷い虐めと差別を子供達ならず大人達からも受けていた。自分は何も悪くないのに、こんな親から産まれたくなかったのに、誰もが自分を見下し嫌悪し蔑んでいた。

「……」

嫌な事を思い出し少女は指先で耳に触れる。耳には一生消えない傷跡がある。小学

生の頃同級生達に無理やり髪を鋏で切られた際、耳も切られたのだ。

幸い聴覚に異常はなく耳が切り落とされる事がなかったが…誰も助けてくれなかったし心配もしてくれなかった。先生も父親も…誰も心配してくれなかった。耳だけではない、身体中虐めで受けた傷が無数にある。

「……」

中学校には行っていない。どうせ行った所で虐めに会うだけだ。義務教育だか何だか知らないが教科書や靴を隠されたり燃やされたりするのだから勉強できない。なら行く意味がない。父親も高い金を払わずに済むと考えてか何も言ってこない

少女の日常といえばゲームをする事だけだ。ゲームはいい、嫌な記憶を忘れられるから。食事は自炊、米くらいは炊ける。彼女の1日の過ごし方は部屋で眠るかゲームをするか、パソコンで検索するかの繰り返しだ。

「……飽きた」

此間買ったゲームはもう全クリした。裏ダンジョンや隠しダンジョン、アイテムフルコンプも達成したし、飽きて当然だ。だが、新しいのを買うとなると外に出なくてはいけない。だが外に出ると村の人達の嫌な視線を受ける事になる。

自分は何も悪くないのに何故こんな仕打ちを受けなければならないのか。ＰＳＰを壊さんばかりに強く握りしめる。その瞳は世界に対する憎悪と絶望、あらゆる負の感情

が混沌の如く混ざり合った眼だった…

そんな彼女の闇に同調する様に、一人の悪魔が魔の手を伸ばした。

『怖い顔をしているねお嬢さん。よかったら私が悩みを聞こうか？』

「え…？」

声が聞こえた、父親は仕事に行っている筈なのに、自分以外この家にいる筈ないのに。彼女はＰＳＰから視線を外し声が聞こえた場所を見る。目を向けた場所にあったのはパソコンだ、電源をつけていなかったのに勝手に電源がつき、その画面が紫色に染まりそこに赤い五芒星が描かれ…青黒い手が五芒星から現れた。

「……!?」

思わずＰＳＰを床に落として彼女はパソコンから飛び出した手を見入る。

「……あなたは、誰？」

怯えながらも少女はそう呟いた。

『そうだね、まずは自己紹介だ。私はトレギア、ウルトラマン　トレギアだ。さあ、次は君の番だよお嬢さん。君の名前は？」

「わ、私は…郡（こおり）　千景（ちかげ）…」

『郡　千景…いい名前だ。では千景。本題に入ろうか』

「本題……？」

トレギアと名乗った謎の人物に少女…千景は戸惑いながらもトレギアの話に耳を傾ける。

『私はね、君を退屈から救いに来たんだよ』

「……え?」

退屈から救いに来た。それがどういう意味か千景には分からなかった。画面の奥に赤く光る双眼が浮かび、その赤い目が千景を捉えた。

『君は選ばれた人間だ、君には世界を変える力がある。そう、私はね、君を導く為にやって来たんだ』

「……選ばれた、人間?世界を変える、力?」

『そう。君が望めば世界中の人々から愛され、必要とされる…勇者(英雄)になれる』

愛される、必要とされる。その言葉に一瞬目を見開く。それはまるで誕生日プレゼントを手渡された子供の様な純粋で輝く目…だが、すぐにその光は消え、俯く千景。

「……無理よ、私なんかがなれる筈ない。だって私は誰からも必要とされてないもの」

自分は今まで誰からも愛された事がなかった。そんな自分が英雄になれる?そんな夢みたいな話ある筈がないと断言する。だがトレギア(悪魔)の囁きは止まらない。

『そんな事はない!自分を卑下しないでくれ千景。君は英雄になれる器だ、誰もが君という英雄を待ち望んでいる!これから起こる災厄を救うのは君なんだぞ千景』

「……炎厄？」

『そうだ。この星は時期に怪獣と呼ばれる存在に脅かされる恐怖の惑星と化す。人間達は怪獣に蹂躙され、死に絶えるだろう…そんな人間達を救うべく立ち上がるのは……君だ。君こそが世界を救う英雄なのだよ郡　千景』

トレギアは千景こそが英雄なのだと熱弁する。千景はその話を、トレギアの言葉を聞いて少しづつ心を開かせつつあった。嘘か本当か分からないが今まで誰も必要としてくれなかった自分を必要だと言い、こうまで自分の事を語ってくれるトレギアが嘘をついていると思えなかったのだ。

『だが千景。君が英雄になる前に少しやっておかなければならない事がある』

「……やっておかなければいけない事？」

『そう、この村の人々に関してだよ』

「……」

『君は勿論知っているだろうがこの村の人々の心は澱(よど)み、穢れきっている。とても救いようがない害虫以下のクズだ。そんな奴らが君が力を持ったと知ったら…どんな反応をすると思う？』

「！」

千景がこの世界で最も嫌悪している場所、そして人間達。そいつらが千景が英雄にな

れる力を持っていると知ったらどんな反応をするかとトレギアが呟き、千景は目を見開く。

『君に媚を売って甘い汁を啜ろうとするか、最初は媚を売っていたが掌返しして化物扱いして迫害するか…そこら辺だろうね』

「ーーーーッ!!」

トレギアの言葉には説得力があった。確かにこの村の奴らならやりかねないと、千景はその事を想像し腑が煮えくりかえるかと思った。

「……ふ、ざけるな……! 私を散々な目に合わせておいて力を持ったら尻尾を振るなんて…許さない! そんなの絶対に許さない!」

『そうだ。私もこんな村の奴らを救う必要はないと考えている…こいつらは害虫だ。駆除しておいた方がいい』

激昂する千景を見てニンマリと笑うトレギア。そして一区切りついて彼はこう告げる。

『さあ、私に願え千景。力が欲しいと、自分の環境を変える力が、見下していた奴らを見返す力が、復讐する力が欲しいと。その願いを私が叶えてあげよう。何故なら私は君の願いを叶えにやって来たのだから…さあ、私の手を取るんだ』

「……」

そう言って手を伸ばすトレギア。まさに悪魔の誘いだった。千景は心の奥底で理解はしていた。この誘いに乗れば自分は高台から身投げする様に堕落していくだろうと。それは身を滅ぼす誘いだと。

（……でも、この誘いを断って…私は何を得ると言うの？）

心の闇が囁いた、この誘いを受けるべきだと。トレギアの言う事が本当なら自分は変われる、新しい自分になれる。悪魔の誘いを蹴飛ばして得られるのは闇の誘いに打ち勝ったと言う偽善じみた個人的な優越だけだ。そんなものでは自分の環境は変えられない。

（私はまだ何もしてない、生まれてから何もしてない。誰かに愛されたい、誰かと一緒に笑いたい、誰かと遊びたい、自分の思う様に行きたい…そんな極平凡な事をしたい…でも、こんな村に居たら、この村の奴らといたら…一生叶わない）

思い出す、自分の耳を裂いた同級生の悪意に染まった笑みを、汚らわしい物を見るような目で自分を見る大人達を、自分を見捨てた母親の冷たい顔を、風邪をひいて寝込んだ自分を心配しなかった父親の声を…

（私の人生は破綻してる。私は何も悪い事してないのに…一生このままなんて嫌よ、私は…誰かに愛されたいの。なら……）

村人達は実に幸せそうだ、千景を自分達より下に見て悦に浸って実に幸せそうだ。村

人達は常に笑っている。自分以外に優しくして、笑い合い、助け合い…千景を除け者して嘲笑う事で村人全員で幸福な生活を送っている。
（……そうだ、皆私から幸せを奪ってたじゃない…なら、私が今度はあいつらから幸せを奪っても問題ないわよね？）
この瞬間、少女の魂は闇に堕ちた。
「…ええ、分かったわトレギア。なってやるわよ…貴方が言う英雄て奴にね」
『……ふふっ。その言葉を聞きたかった』
トレギアの手を握る千景。トレギアは悪魔の様に微笑んだ気がした。そして千景がトレギアの手を握っているとふと、握った手に何か現れた。
「？これは……？」
それは青い縦長の青い機械だった。不思議そうにそれを見つめる千景。それを見てトレギアが微笑む。
『それはバトルナイザー。君が使役する君だけの仲間が収納された機械さ。その中には既に三体の怪獣がいる…君の命令を忠実にこなす最強の神がね』
ーーークウウウウウウウウウッ!!ーーー
ーーーピポポポポポポポ・・・ゼエットオオオオオオオオン!!ーーー
ーーーギィガアアオオオオオオオオン！ーーー

機械から三体の怪獣の…否、悪しき神々の咆哮が部屋に響いた。三つの枠にその神の姿が映る…それを見て千景は放心し…そして笑みを浮かべた。

「……この子達が私の…仲間？私だけの？」

『そうだ。君だけのお友達だよ千景。それに怪獣達だけじゃない。私もサポートしよう。私達は君を否定しない、君だけの仲間さ』

いつの間にかトレギアはパソコンから千景の部屋に等身大で現れていた。そして微笑む様に千景に顔を近づける。

『さあ、力は手に入れた。後は君の栄光の道を遮る虫ケラを潰すだけだ…出来るね？』

トレギアのその言葉に千景は不気味に見える笑みを浮かべて顔を縦に振った。

「……」

千景は数週間ぶりに家から外に出た。燦々と太陽が世界を照らし、手で日差しを遮る千景。だが、千景にはそれが太陽がまるで新しい自分を祝福しているのだと考え、にっこりと笑う。

「……見つけた」

千景の視線の先には二人の少女が楽しそうに歩いていた。千景はその二人を知っている、確か自分の事を「淫売の子」と呼んでいた奴らだ。そんな相手を見つけ、千景は

笑みを浮かべた。
「久しぶり、元気だったかしら?」
二人が振り向く、そしてゴミを見る様な目を千景に向ける。自分達に親しげに話しかけたのが自分達が常日頃見下している人物だったのだ、不快になるのも当然。だが、同時に疑問に思った、郡　千景とはこんな明るく自分達に話しかけるのかと、それに…何故か千景の笑みが不気味で、二人は怖くなった。だが、自分達が見下している相手に萎縮するなどプライドが許さない、二人は睨む様に千景を見る。
「淫売の子が私達に何の用よ」
「い大した用じゃないわ。すぐに終わるから」
不気味な笑みを浮かべたまま千景はそう告げる。そして次にこう言った。
「よかったわね、貴方達みたいな人間でも私の役に立てて」
そう言って千景は懐からバトルナイザーを取り出した。バトルナイザーの一つの枠が怪しく光る。
「出て来なさいイリス。食事の時間よ」
ーーークウウウウウウウウウッ!!ーーー
「「え?」」
グサッ、と二人の少女の胸に何かが刺さった。二人が胸に目を向けると胸に触手が突

き刺さり服が赤に染まっていた。そして少女達が何か言う前に彼女らの身体は干からび木乃伊と化した。

「ふふふ…どうイリス?こんな汚いゴミでも少しはお腹の足しになったかしら?」

ーーークウウウウッ……ーーー

「そう、まだ足りないのね。大丈夫よイリス。まだまだ村人(餌)はたくさんあるんだから…」

千景がバトルナイザーに向かってそう囁くと目を横に向ける。視線の先には惨劇を見ていた村人の男がいた。

「ひっ……!」

男は千景から背を向けて逃げ出した。それを見て千景はくすりと笑う。

「私達から逃げられると思ってるの?」

彼女は嗤う、今度は自分の番だと。今まで受けた屈辱を返す番だと。

それから起こった事は特記する事はない。バトルナイザーから現れた触手が千景が住んでいた村の人々の体液(生き血)を吸い取り木乃伊にし皆殺しにした。ただそれだけだ。

正しく死屍累々、男も女も子供も大人も老人も、千景を虐げていた連中は全員死んだ。それは哀れであり、因果応報だった。なにせ何の罪もない少女を優越感の為に虐げていたのだ…その死に方は同情しそうだが彼らがやっていた行いを考えると罰が下ったの

だと言うしかない。
「……終わってみると呆気ないものね」
バトルナイザーを手で弄りながらそう千景が呟く。自分を長年苦しめていた元凶を呆気なく鏖殺して何処と無く退屈そうだった。
『お疲れ千景。どうだい自分を虐げていた奴を殺し尽くした感想は？』
「……なんて言うのかしらね、簡単に殺しちゃったてところかしら。よく考えればもっと苦しめて殺すべきだったかしら」
『確かに…君にした行いを考えるとただ殺すだけなんて生温かったかもしれないねぇ』
トレギアとそう残虐な会話を行う中、彼は心の中で笑みを浮かべていた。
（ふむ……私のイスキュロス・ダイナミスの後押しもあるだろうが…このマイナスエネルギーは間違いなく彼女の心の底から溢れるもの…ふふ。まさか人間の少女からこれだけのマイナスエネルギーが発生するとは…余程辛い人生を歩んでいたんだろうな）
トレギアには対象の怒りや憎しみといった負の感情を増幅する凶暴化促進光線がある。それを千景に使って凶行に走らせたのだが…これを使わずとも凶行に走っていただろうとトレギアは内心で笑う。
『もう君の道を遮る者はいない。さあ、千景。私と共に世界を救……む？』
急に地面が揺れ始めた。それに少し戸惑うトレギアと千景。そして地面が爆発した

様に土塊が吹き飛び土煙が舞う。そして地中から一匹の赤い怪獣が姿を現したのだった。

ーーーシュイイイイィィィィィィィィ!!ーーー

「……トレギア、あれは何？」

『あいつは確か……婆羅護吽（バラゴン）。四国の地を守護する護国聖獣（守護獣）の一柱さ』

そのパグ犬に似て少し愛嬌があって可愛いとも言える額に大きなツノが生え、左右には鰭（ヒレ）が耳の様に生える赤い怪獣の名は地の神　バラゴン。普段は小豆島のマグマの中に潜んでいるがトレギアと千景の怪獣達の邪悪な波動を感じ、ここまでやって来たのだ。

ーーーシュイイイイィィィィィィィィ!!ーーー

自分がやって来たからにはもう悪事は許さない！そう言わんばかりに雄叫びを上げるバラゴン。それを鬱陶しそうな目で千景がバラゴンを睨む。

「……つまり敵て事ね」

『そうだ。あの怪獣は君を危険視して殺すだろう。さてどうする？』

「決まってるじゃない。折角手に入った力を手放すわけないじゃない」

千景はバトルナイザーを構える。そして三つの枠が怪しく輝く。

「行きなさいイリス、スペースゴジラ、ゼットン」

ーーーバトルナイザー・モンスロードーーーー
ーーークウウウウウウウウウウッ!!ーーーー
ーーーギィガアアアオオオオオオオオン!!ーーーー
ーーーピポポポポポポポ・・・ゼエットオオオオオオオオン!!ーーーー
機械音が響き赤い光がバトルナイザーから流星の如く放たれる。光の中より現れたのは三体の禍々しい怪獣達。
一体は4本の自由自在に蠢く触手が生えた黄色に光る単眼持つ怪獣。超古代文明の人間が誕生させた超遺伝子獣の変異体である美しくも邪悪な風貌の邪神…柳星張（りゅうせいちょう）　イリスという守護神　ガメラと対になる破壊の邪神。
もう一体は黒き巨体に白い水晶に似た結晶体が両肩から背中にかけて生え尻尾と背びれも結晶化している怪獣…怪獣王の細胞が結晶生物と恒星の爆発エネルギーを吸収して誕生した戦闘生命…宇宙凶悪戦闘獣　スペースゴジラというモスラとバトラと因縁がある厄災の邪神。
最後の一体は細長い黒いフォルムに所々黄色に発行する部位がある昆虫に似た人型に近い姿の怪獣。伸縮自在の翼に尻尾、突起状の腕を持つ無機的な怪獣…光の巨人を終わらせた（殺し）終わりの怪獣の究極体…宇宙恐竜　ハイパーゼットン（イマーゴ）という滅亡の邪神。

この怪獣達こそ千景の相棒達。いずれも並みの怪獣とは一線を画する怪獣達である。そんな強大な敵を前にしてもバラゴンは臆する事なく三体を睨む。守るべき場所を脅かす敵を前にバラゴンは逃げる事は決してない。

ーーーピポポポポポポポ・・・ゼェットォォォォォォォン！ーーーー

ハイパーゼットンは胸の発光体から暗黒火球と呼ばれる一兆度を超える火球を放つ。それだけで並大抵の敵を滅ぼす技、それを数発もバラゴンに放つ。それに対しバラゴンはその身で火球を受ける。バラゴンの身体に火球が炸裂する。

ーーーシュイイイィィ！ーーーー

『ほう、ゼットンの火球を耐えるか。中々やるじゃないか』

バラゴンはなんと一兆度もあるゼットンの暗黒火球を耐えきったのだ。なにせバラゴンは普段マグマの近くに生息しているので火炎系の攻撃には非常に強いのだ。その耐久性はゴジラ（怪獣王）の熱線を耐える程だという。

ーーーーシュイイイイイイイイイイ!!ーーーー

今度はこちらの番だとバラゴンが吠える。バラゴンは口から一億度は優に越す赤い炎を放つ。スペースゴジラがフォトン・リアクティブ・シールドと呼ばれるバリアを展開し、赤炎をバラゴンへと跳ね返す。

ーーーーシュイイィィィ！ーーーー

それに対しバラゴンは穴を掘って地中へと潜り赤炎を避ける。そして海中を泳ぐかのように地中を自在に駆け巡る。そして三体がどこにバラゴンが潜んでいるのかと考えたその直後、巨大な地響きが鳴り響き三体が立つ地面が陥没し三体は落とし穴に落ちた様に地中に落下する。

ーーークウウウウウウウウウウッ!?ーーー

ーーーギィガアアアオオオオオオオン!?ーーー

ーーーピポポポポポポポ・・・ゼエットオオオオオオオオオン!?ーーー

「!?」

『おや……可愛らしい見た目と違って中々やるじゃないか』

地の神の名の通りバラゴンは陸上と地中での戦いに長けたエキスパートなのだ。イリス達の足元の地面を掘る事で空洞を作る事で地盤沈下を誘発する。これぞバラゴンの真価である。

ーーーシュイイイイイイイイイ!ーーー

「…やってくれるわね。ゼットン!テレポートで背後に回り込んで刺し殺してやりなさい!」

ーーーピポポ・・・ゼエットオオオン!ーーー

ゼットンはテレポートでバラゴンの背後へと移動、鋭い腕で刺し殺そうとするがバラ

ゴンは鰭をパタパタと羽ばたかせる…すると風が発生しバラゴンを中心に竜巻が形成され、風の防壁に阻まれゼットンの腕は弾かれた。

ーーーゼェットォオン!!?ーーー

バラゴンは漢字での表記は婆羅護吽と書く。護とは守護のこと、吽とは阿吽…つまり狛犬。守護する狛犬という意味だ、なら婆羅とは何を意味するのか？これは婆羅（バラゴン）という怪獣の名を指す。とある集落で婆羅陀魏山神（バラダギサンジン）と崇拝されている神と同一視されている。その神の力は風を操る力なのだ、そう。バラゴンは地の神でありながら火と風を司る怪獣でもあるのだ。

ーーーシュイイイイイ!!ーーー

バラゴンは気流を操り空へと走る様に駆け上がる。そして上空から赤炎を吐きイリス達を攻撃する。

「……調子に乗るな！」

ーーーギィガアアアオオオオオオオン！ーーー

ーーーシュイイイイイイイイイ!?ーーー

千景がバトルナイザーを強く握るとスペースゴジラが力強く咆哮し、赤色の光線　コロナビームを発射、上空を滑る様に駆け巡っていたバラゴンに命中し火花を散らしながら地上へと落下する。

「雑魚キャラみたいな姿だったから油断してたわ…中ボスだったのね。イリス、スペースゴジラ、ゼットン。本気で殺すわよ」

ーーークウウウウウウウウウウッ！ーーーー

ーーーギィガアアアオオオオオオオン！ーーーー

ーーーピポポポポポ・・・ゼエットオオオオオオオオン！ーーーー

千景の指示を聞き三体の悪しき神は吠える。バラゴンは赤炎を放つ、それに対しイリスは４本の触手…テンタクランサーで赤炎を弾いて起動を逸らし、森の一部が炎上する。

ーーーギィガアアアオオオオオオオオン！ーーーー

スペースゴジラが突進する、１２０メートルはあろう巨体が３０メートルしかないバラゴンに迫る。バラゴンはツノを向けて爆進するも体格差もありスペースゴジラの蹴りを喰らいボールの様に吹き飛ばされる。

ーーーシュイイイ……シュイイイイイィィ！ーーーー

蹴飛ばされたバラゴンは呻きながらもスペースゴジラに立ち向かおうとして…急にバラゴンの体の一部が裂けた。

ーーーーシュイイイ？ーーーー

ーーークウウウウウウッ！ーーーー

イリスが触手から放った超音波メスによりバラゴンの身体が切り裂かれたのだ。驚くバラゴンの頭上にゼットンがテレポートで現れ、腕を振り下ろしバラゴンのツノを破壊する。

ーーーシュイイイイイィィィィィ!?ーーー

ツノを破壊され思わず後ずさるバラゴン、だがイリス達は容赦なくバラゴンを袋叩きにする。ゼットンは至近距離からの暗黒火球、スペースゴジラは接近しながらのコロナビーム、イリスは4本の触手から超音波メスを放ちバラゴンを痛めつける。

ーーーシュイイイィィィ……ーーー

悲痛な声を上げるバラゴン、もしここに彼の戦う姿を見ているものがいたとしたら可哀想と同情する者や頑張れと応援する者がいただろう。それぐらい容赦ないリンチを受けるバラゴン。だがバラゴンの眼は死んでいない、まだ戦う事を諦めていない。

火球で牙を折られ、鰭を強引に捥がれ、ゼットンの腕の一撃で手足を折られ、スペースゴジラの蹴りで内臓が潰れ、イリスの触手に左目を潰され、身体から赤い血が流れても、バラゴンの戦意は折れない。

ーーーシュイイイイイィィィィィ!!!ーーー

バラゴンは聖獣だ、国を守護する神だ、自分がここで負けてしまえば、イリス達が罪のない人を蹂躙するだろう、トレギアという悪が良からぬ事をするだろう、それに何よ

り。

バラゴンの瞳にたった一人の少女の姿が映った。邪悪に唆されて闇に堕ちかけている少女。人間の悪意に飲み込まれ希望を失った少女。本来なら自分の様な正義の怪獣を使役し他にいる仲間達と共に世界を救う役割を担う少女。そんな彼女が闇に堕ちてはダメだ、なんとしても救ってみせる。地の神(自ら)の名にかけて、彼女を闇から救い出す。

ーーーシュイイイイイイイイ!!!!ーーー

バラゴンが吠えた。彼の口に莫大な熱量が集まっていく。その熱量は今までの炎と比較にならない。

『大技を出すつもりか』

火炎を口に収束させバラゴンはキッとイリス達を睨むと口から赤炎を放射。更に風を操る力を使い、火力を上昇される。その赤い炎は並みの怪獣なら骨すら残さぬ程の熱力を秘めていた。正に乾坤一擲、最後の力を振り絞った渾身の一撃。

ーーーピポポポポポポポポ・・・ゼエットオオオオオオオンーーー

そんなバラゴンの決死の一撃を、ゼットンはバリアを展開する事で完全に防いでしまった。バラゴンの想いの詰まった全力の一撃を邪神は呆気なく防いでしまったのだ。

「……殺(や)りなさい」

ーーークウウウウウウウウウウウッ!!!!ーーー

ーーーギィガアアオオオオオオオン!!!ーーー
ーーーピポポポポポポポ・・・ゼエットオオオオオオオオオオン!!!ーーー
イリスは4本の触手から超音波メスを重ねて放ち、スペースゴジラは極太のコロナビームを放射、ゼットンは太陽の如く輝く巨大な暗黒火球を、三体の怪獣の三つの技がバラゴンへと放たれた。一発だけでも死に絶える一撃、それが三つ。間違いなく喰らえばバラゴンは死ぬだろう。
ーーーシュイイイイイィィィィィ……ーーー
爆裂があった。バラゴンの弱々しい声は爆音に掻き消されその身体が爆煙に包み込まれた。

殺した。そう千景は思った。自分の怪獣(仲間)は無敵だ。そんな怪獣達の最強の一撃を3発も喰らい生きている筈がない。そう千景は思っていた。
……生きている筈がないのに、爆煙が薄れ、煙の中にうっすらと浮かんだ影に、千景は目を細めた。
「……」
バラゴンは死んでいた。原型こそ留めていたが身体中が焼け爛れ、骨が露出している箇所が所々見られ、見るだけでも痛ましい姿の遺体となっていた。だが、死してなおバ

ラゴンは四つ脚で大地に立ち、もう光の宿す事のない眼を開きイリス達を睨んでいた。最後までバラゴンの戦意は折れなかったのだ。

ーーークウウウウウウウウウウッ……ーーー

ーーーギィガアアオオオオオオオオン……ーーー

ーーーピポポポポポポポ・・・ゼェットオオオオオオオオン……ーーー

そんなバラゴンを見て三体の怪獣は思わず後ずさってしまう。自分達よりも弱い筈なのに、もう死んでいるのに、その遺骸を見て恐怖を感じてしまう。

「……戻りなさい」

千景は顔を少し歪めながらイリス達を回収する。千景は何か思う様にバラゴンの遺体を見つめていた。

『さて千景。この村の人間も皆殺しにしたし、邪魔な怪獣も殺した…これで君の邪魔をする奴らは全員消えたかな?』

トレギアはそう千景に問いかける。これで邪魔者全て殺したかと。その問いを聞いて千景は目を閉じ…こう告げた。

「いいえ、まだよ。まだ一人、殺してない人間がいる。それに何処にいるか分からないけど…まだ殺してやりたい奴がいるわ」

『そうか、いい殺意だ。そんな君にこれをプレゼントしよう』

まだ殺していない奴がいる。その言葉を聞きトレギアは邪悪に嗤い、ある物を闇の中から出現させた。

「なん、だこれ……!?」

千景の父はいつもの様に夜遅くまで酒を飲んで帰ってきた。そして破壊の限りを尽くされ荒れ果てた村を見て酔いが覚めた。

「何が起こったんだ!?地震か火事か!?いやそんな事より…僕の家は!?明日から何処に住めばいいんだよ!?野宿なんて嫌だぞ!」

父親は娘の心配はおろか、村の人々の心配もせず、ただ明日から何処に住めばいいのかと叫んだ。そんな父親を嘲笑う様に悪魔が背後から忍び寄った。

『……娘どころか他人の心配もしないとは…私が見てきた中でも君ほどの自己中心的な宇宙人(人間)はいなかったぞ』

「!?だ、誰…て、ば、化け物!?」

父親はトレギアの姿を見て腰を抜かす。そんな情けない姿を見てトレギアはため息を吐く。

『……あの地球人の小娘を利用している私が言える立場ではないかも知れないが…この村の人間といいお前といい…救いようがないな。確かヒルカワという男よりも醜悪で

マイナスエネルギーの塊の様な人間だな。流石の私でも引いたぞ？』
「な、なんなんだお前は…!?お前が村をやったのか!?ぼ、僕も殺す気なのか!?やめてくれ！僕は死にたくない！見逃してくれ！」
土下座をしてまで必死に命乞いする父親、涙目になって叫ぶ様に金切り声を上げる男を見て流石のトレギアも気色の悪さで顔を歪めた。
『安心しろ、私はお前を殺すつもりはないさ。私は…だがな』
「！ほ、本当なのか…？」
父親はほっと息を吐く。良かった、自分だけはなんとか助かったのだと…だが、トレギアは笑みを浮かべる。
『ああ、見逃してやるとも……私は、だがな』
「へ？」
父親がどういう意味かと考えた直後、後ろから足音が聞こえた。振り返ろうとする父親…直後だった、彼の右腕が宙を舞った。
「……へ？ぎゃあぁぁぁぁぁ!!?」
右腕が切断されたと気づいた直後、壊れた蛇口から水が大量に噴出する様に切断箇所から鮮血が噴水の様に吹き出た。痛みのあまり汚い声を上げ涙を流しながら右腕を抑える父親。喘ぎながらも父親は顔を上げ足音が聞こえた場所を見る…そこに立ってい

たのは彼の身近にいる人物だった。
「千景……？」
　赤い鎌を構えた少女…千景は冷たい瞳で父親を見つめていた。
「生きていたのか…？いや、そんな事よりも…何故僕の右腕を!?巫山戯るな！今まで育ててやった恩を忘れたのか!?くそ！この親不孝者！」
『……とことん救いようがないなこいつは…』
　娘が生きていたことを喜ぶのではなく、何故自分の右腕を切断したのかと吠える父親を見てトレギアは屠殺される豚を見る目で彼を見つめる。
『まあいいさ、私としては彼女が手に入って上機嫌なんだ。最後に教えてやろう。あの鎌はギガバトルナイザーという私の先輩の扱っていた武器を再現した鎌だ』
　かつてベリアルという悪の巨人がいた、その巨人の武器はギガバトルナイザーという兵器だった。それを再現したのが千景が持つ鎌だとトレギアは呟く。
『あれは今からお前の命を刈り取る死神の刃だ。喜ぶといい、娘の栄光の道の第一歩の生贄となるんだ、親として光栄の極みだろ？』
　ジリジリと千景が鎌を持って父親に迫る。父親は千景から逃げようとするが恐怖で動けなかった。
「や、やめてくれ千景！殺さないでくれ！お、親を殺す気か!?」

「……ねえお父さん、私ずっとお父さんに言いたかった事があるの」

怯える父親に対し千景は笑顔を浮かべた。

「お父さんが私の事が嫌いだった様に…私も大嫌いだったわ」

そう言って大鎌を振り上げる千景、父親は察する。この後千景が何をするか、自分がどうなるかを。

「い、嫌だぁぁぁぁぁぁ!!!死にたくない！死にたくない！やめてくれ千景！やめてくれ！僕は死にたくない！死にたくない！誰か、誰でもいいから助けてくれぇぇ!!」

子供の様に泣き叫んで助けをこう父親、だが当然の如く誰も助けてくれない。誰も千景を止めてくれない。無情にも命を刈り取る死の刃が振り下ろされる…最後の瞬間まで彼は叫んでいた、死にたくないから…もし、少しでも娘を大事にしていたら、愛情を注いでいたら、こんな目には合わなかったというのに。同情の価値はない、全ては彼の自業自得、因果応報なのだから。

トレギア（悪魔）は微笑んだ。邪神達は嗤っていた。この日、勇者になる筈だった少女は闇へと堕ちたのだ。